

茨城県教育財団文化財調査報告第301集

# 東とうノ越こし遺跡

一般県道大竹鉾田線道路改築事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

平成20年3月

茨城県鉾田土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団





東ノ越遺跡より鉾田市街地を臨む（北東より）



## 序

茨城県は長期的な展望のもとに、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県土全域にわたる調和のとれた発展を図るため、県内の交通体系の整備を進めており、一般県道大竹鉾田線道路改築事業も、その目的に沿って計画されたものですが、この事業予定地内には東ノ越遺跡が所在します。

そのため、財団法人茨城県教育財団は、茨城県鉾田土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成17年6月から同年8月までの2か月間にわたって同遺跡の発掘調査を実施しました。

本書は、東ノ越遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県鉾田土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、鉾田市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 人見 實 徳



# 例 言

- 1 本書は、茨城県銚田土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度に発掘調査を実施した、茨城県銚田市大字畑田字東ノ越702番地の6ほかに所在する東ノ越<sup>とうのこし</sup>遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成17年 6月1日～平成17年 8月31日  
整理 平成20年 1月1日～平成20年 3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 檜村 宣行  
主任調査員 松本 直人  
調査員 菊池 直哉
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員菊池直哉が担当した。

# 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X軸=+17,880m、Y=+63,200mの交点を基準点(A 1 a1)とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…、1以西は-1とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1」、「B 2 b2」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SE-井戸跡 SD-溝跡 SN-粘土貼り土坑 P-ピット K-攪乱  
遺物 P-土器・陶器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品・鉄滓  
土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、遺構実測図は60分の1の縮尺での掲載を基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物実測図中の表示は次のとおりである。

 焼土・施釉	 火床面
 竈部材・粘土・炭化材・黒色処理	 煤・柱あたり痕
●土器	○土製品
□石器・石製品	- - - - - 硬化面

- 4 土層観察表と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は、m・cm、kg・gである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N-10°-E）。

# 抄 録

ふりがな	とうのこしいせき							
書名	東ノ越遺跡							
副書名	一般県道大竹銚田線道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第301集							
著者名	菊池 直哉							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2008(平成20)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
とうのこしいせき 東ノ越遺跡	いばらきけんほこたしのおおあざかまた 茨城県銚田市大字畑田 あざとうのこし 字東ノ越702番地6 ほか	08402 — 248	36度 09分 32秒	140度 32分 16秒	34 ~ 36m	20050601 ~ 20050831	5,970m <sup>2</sup>	一般県道 大竹銚田 線道路改 築事業に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東ノ越遺跡	集落跡	奈良	竪穴住居跡	5軒	土師器(坏, 甕, 甗), 須恵器(坏, 蓋, 壺, 甕), 石製品(勾玉)			
	その他	縄文			縄文土器(深鉢), 石器(磨製石斧)			
		中世	井戸跡 粘土貼り土坑 土坑	2基 3基 1基	土師質土器(内耳鍋), 陶器(天目茶碗)			
		時期不明	竪穴住居跡 溝跡 土坑	2軒 1条 96基	土師器, 須恵器, 土師質土器, 陶磁器, 石器(砥石), 鉄滓			
要約	奈良時代と中世の複合遺跡である。調査区の中央部では奈良時代の竪穴住居跡が、東部では中世の井戸と粘土貼り土坑が確認された。古代の集落は、8世紀第1四半期に形成され、第4四半世紀から9世紀の初頭までには廃絶した。中世の井戸や粘土貼り土坑は、周辺に生活の痕跡を示す遺構や遺物が少なく、集落縁辺部に位置していたと推測される。							

# 目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 奈良時代の遺構と遺物	8
竪穴住居跡	8
2 中世の遺構と遺物	18
(1) 井戸跡	18
(2) 粘土貼り土坑	21
(3) 土坑	23
3 その他の遺構と遺物	28
(1) 竪穴住居跡	28
(2) 溝跡	30
(3) 土坑	31
(4) 遺構外出土遺物	40
第4節 まとめ	42

写真図版

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成14年7月4日、茨城県銚田土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道大竹銚田線道路改築工事事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成16年3月9日に現地踏査を、同年11月16～19日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成16年12月2日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県銚田土木事務所長あてに、事業地内に東ノ越遺跡が所在し、その取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成16年12月10日、茨城県銚田土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成16年12月21日、茨城県銚田土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

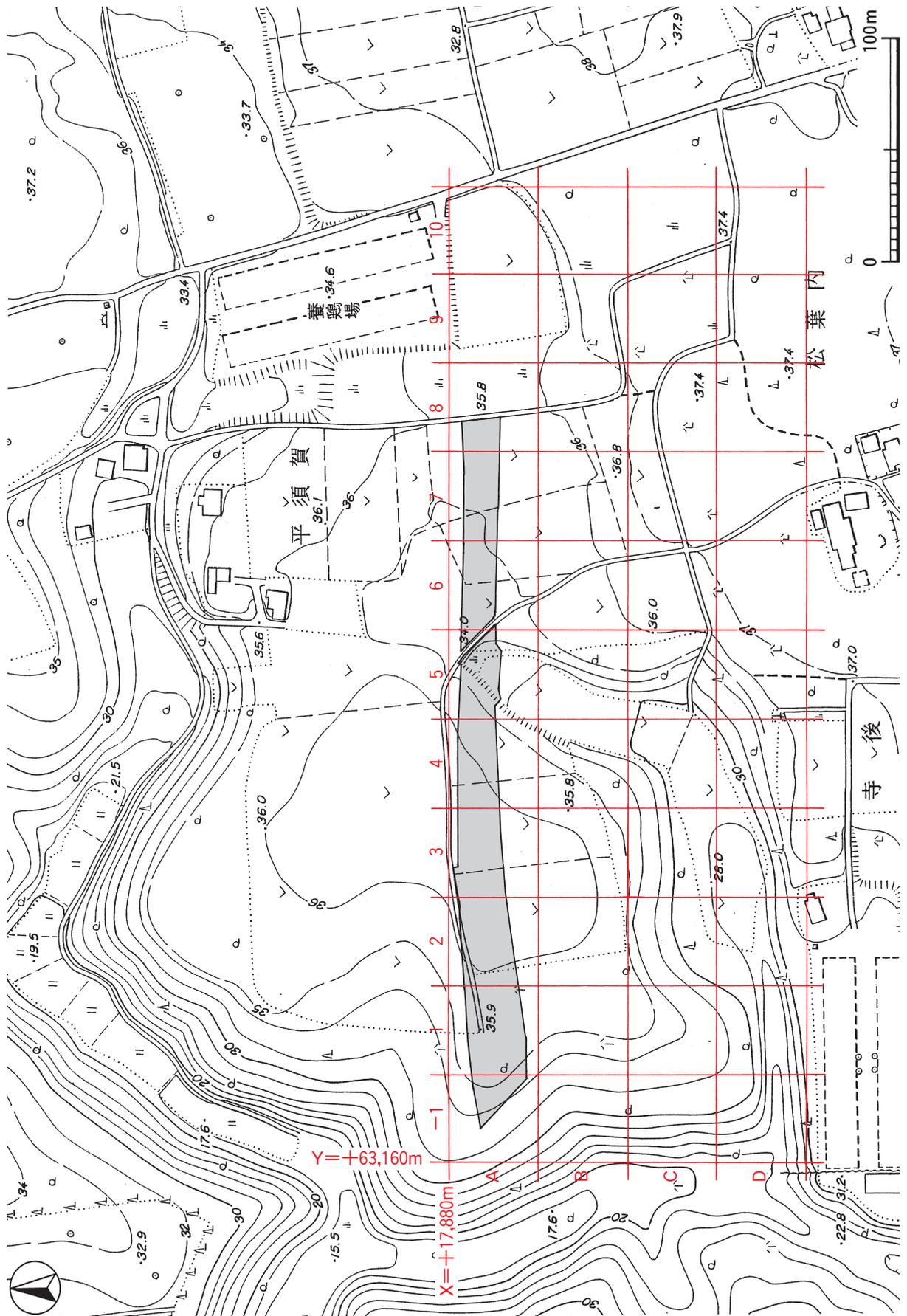
平成17年1月25日、茨城県銚田土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般県道大竹銚田線道路改築事業に係わる埋蔵文化財の調査について協議した。平成17年2月9日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県銚田土木事務所長に対して、東ノ越遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県銚田土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年6月1日から平成17年8月31日まで東ノ越遺跡の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

東ノ越遺跡の調査経過については、その概要を表で記載する。

期間 工程	6月	7月	8月
調査準備 表土除去 遺構確認	[Shaded bar spanning June]		
遺構調査	[Shaded bar spanning June, July, and August]		
遺物洗浄 注記作業 写真整理	[Shaded bar spanning June, July, and August]		
補足調査 撤収			[Shaded bar in August]



第1図 東ノ越遺跡調査区設定図（銚田町都市計画図 1：2,500）

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

東ノ越遺跡は、茨城県銚田市大字畑田字東ノ越702番地の6ほかに所在している。

銚田市は、茨城県の南東部に位置している。平成18年に旧鹿島郡銚田町・旭村、行方郡大洋村の三町村が合併し、東西17km、南北24kmで、面積203.9km<sup>2</sup>の銚田市が誕生した。市域は、東が鹿島灘、北は涸沼、南は北浦にそれぞれ面し、鹿嶋市、行方市、小美玉市、茨城町、大洗町に隣接しており、市街地は北浦の北岸に面した巴川と銚田川の合流点付近で、古くからの水陸交通の要衝である。

銚田市の地形は、南西部が標高25～36mの行方台地であり、台地の北東部には巴川が北西から南東へ流れている。巴川の東部から鹿島灘に面した地域には標高20～44mの鹿島台地が広がっており、市域のほぼ中央部を北部から南部へ銚田川が流れている。銚田川をはじめ、鹿島台地を開析する河川のほとんどは北浦へと流入し、鹿島灘へそそぐ河川は少なく、開析谷は深く樹枝上に発達した複雑な開析台地を形成している。両台地上は、地下水面が深いため灌漑が困難であり、長く開拓が進まずに平地林が広がっていたが、近年その大部分が畑地化され、平地林は台地斜面部にわずかに残るだけとなっている<sup>1)</sup>。

銚田川は、北浦へとそそぐ河口付近で巴川に合流して銚田低地を形成しており、両河川と北浦に面した低地は水田地帯として利用されている。

東ノ越遺跡は、銚田市役所から東へ1.8kmほどでの長茂川と田中川に挟まれた細長い舌状台地上に位置している。遺跡の南部と北部には長茂川の支谷が深く入り込んでおり、遺跡はこの支谷に面した標高35mほどの台地の縁辺部に形成されている。

### 第2節 歴史的環境

北浦、巴川及び銚田川を臨む台地には、貝塚や古墳及び集落跡などが多く分布し、古くから多くの人々の生活の場であったことを示している。

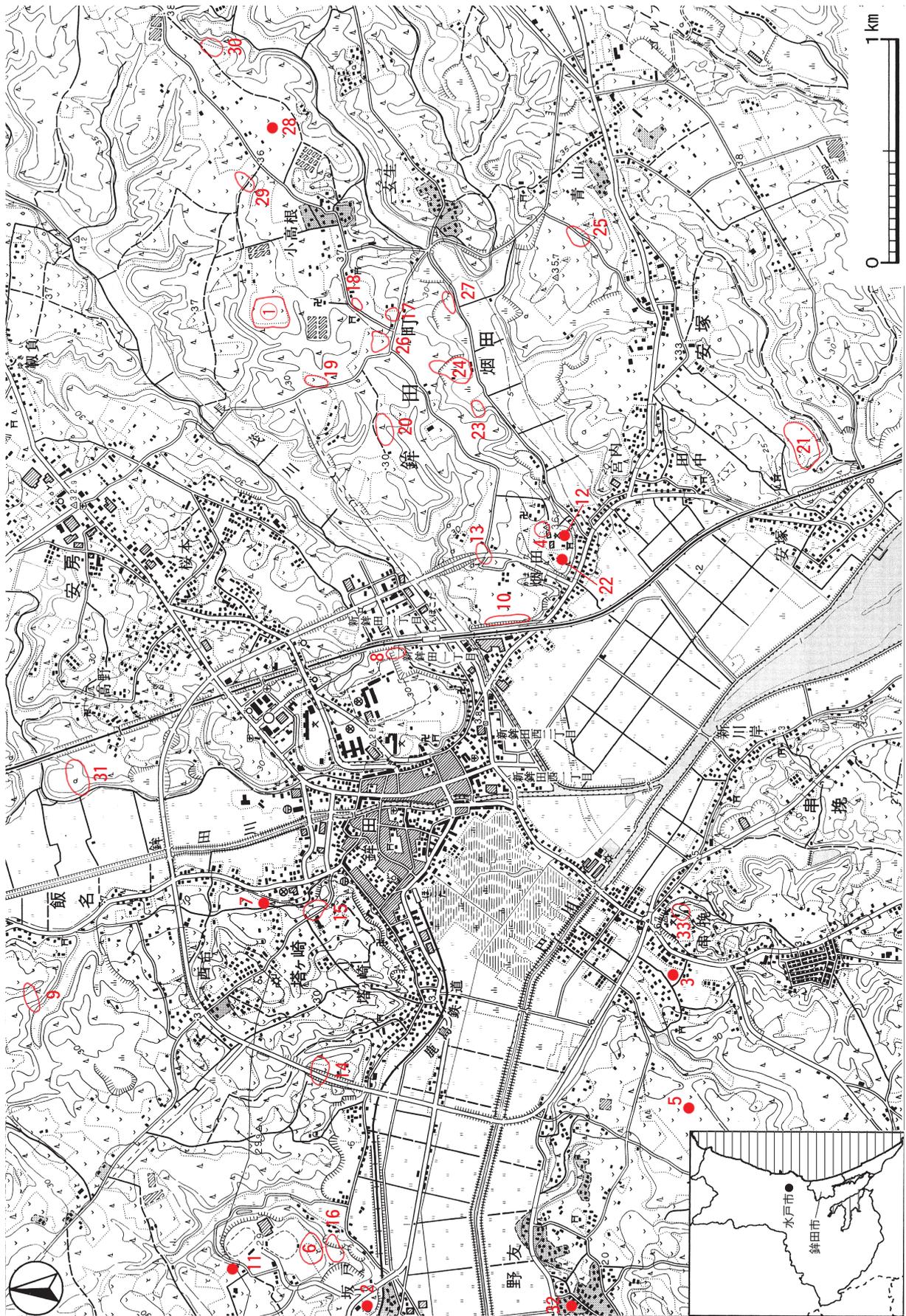
旧石器時代の遺跡は確認されていないが、銚田川流域の徳宿遺跡から数点の尖頭器が出土しており<sup>2)</sup>、坂戸遺跡〈2〉からは搔器が1点出土している<sup>3)</sup>。

縄文時代の遺跡は巴川と銚田川流域の台地縁辺部に広く分布している。

巴川流域には貝塚として、早期から前期に形成された串挽貝塚〈3〉では、ハイガイ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ<sup>4)</sup>の貝類と繊維土器が出土しており<sup>4)</sup>、そのほか中期の加曾利E式土器やハマグリなどの貝類が出土した畑田貝塚<sup>5)</sup>〈4〉、阿玉台式土器や加曾利E式土器とハマグリ・ウミナ等の貝類が出土した権現平貝塚<sup>6)</sup>〈5〉などが周知されている。また、梨ノ子木久保遺跡では、早期沈線文系土器から中期加曾利E式の<sup>7)</sup>、浦房地遺跡〈6〉では、中期を中心に早期から後期中葉にかけての縄文土器が出土しており<sup>8)</sup>、坂戸遺跡でも中期の住居跡2軒が調査されている<sup>9)</sup>。

銚田川流域には、前期の平出久保遺跡<sup>10)</sup>〈7〉、中期の銚田貝塚〈8〉、飯名貝塚〈9〉、後期の石崎台遺跡、晩期の徳宿遺跡、鎌田遺跡などがあり、平出久保遺跡では、前期の竪穴式住居跡5軒が確認されている。

弥生時代の遺跡は銚田川とその支流の台地縁辺部に徳宿遺跡<sup>11)</sup>、塙遺跡、安塚遺跡、畑田遺跡<sup>12)</sup>〈10〉が確



第2図 東ノ越遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 1：25,000「鉾田」「常陸玉造」）

表1 東ノ越遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	東ノ越遺跡		○		○	○	○		18	永蔵寺遺跡					○		
2	坂戸遺跡		○		○	○			19	角来遺跡		○			○	○	
3	串挽貝塚		○						20	長泉寺遺跡					○	○	
4	畑田貝塚		○						21	新宮遺跡		○	○	○	○		
5	権現平貝塚		○						22	畑田城跡						○	
6	浦房地遺跡		○	○	○				23	富士山館跡						○	
7	平出久保遺跡		○		○	○			24	塙館跡						○	
8	銚田貝塚		○						25	母貝館跡						○	
9	飯名貝塚		○						26	馬場館跡						○	
10	畑田遺跡		○	○	○				27	大樋上館跡						○	
11	当間二ツ塚古墳				○				28	金色館跡						○	
12	氷川古墳				○				29	勧請地館跡						○	
13	畑田川波遺跡				○	○			30	龍ヶ谷館跡						○	
14	沢三木台遺跡		○		○	○			31	三階城跡						○	
15	西台遺跡		○		○				32	野友城跡						○	
16	辰ノ峰遺跡		○		○	○			33	郷土館跡						○	
17	宮脇遺跡		○			○											

認されている。徳宿遺跡と塙遺跡から中期の足洗式土器が出土しており、安塚遺跡では足洗式土器と後期の十王台式土器が出土し、畑田遺跡では十王台式期の竪穴住居跡4軒が調査されている。

古墳時代になると、古墳は巴川流域に不二内古墳群<sup>ふじうち</sup>、野友権現峯古墳群<sup>のともごんげんみね</sup>、当間二ツ塚古墳<11><sup>とうまふたつづか</sup>、二ツ塚古墳<sup>ふたつづか</sup>などが分布し、銚田川流域には氷川古墳<12>、安房古墳群<sup>あんぼう</sup>などが周知されており、平出久保遺跡では円墳3基が調査されている<sup>13)</sup>。不二内古墳群からは、「男子跪座像」や「壺をささげる女」などの人物埴輪が出土しており<sup>14)</sup>、二ツ塚古墳からは直刀、勾玉が出土している。安房古墳群では、板状の雲母片岩を使用して造られた箱式石棺が出土し、内部から頭を東部に向けた伸展葬の人骨が確認され、7世紀中葉から8世紀初頭に位置づけられる須恵器、鉄鏃も出土している。集落跡は、銚田川流域に中期から後期の塙遺跡、畑田川波遺跡<13>、沢三木台遺跡<14>、西台遺跡<15>、平出久保遺跡が位置し、巴川流域には坂戸遺跡が知られている。畑田川波遺跡では後期の竪穴住居跡15軒<sup>15)</sup>、平出久保遺跡では前期から後期にかけての竪穴住居跡29軒<sup>16)</sup>、坂戸遺跡では中期の竪穴住居跡1軒<sup>17)</sup>が調査され、土師器や須恵器が出土している。

奈良・平安時代の遺跡は巴川とその支流の台地上に多く、沢三木台遺跡、坂戸遺跡、辰ノ峰遺跡〈16〉、阿巳ノ山遺跡、柿の木遺跡のほか、多数の遺跡が分布している。鉾田川とその支流の長茂川の沿岸台地上には鎌田遺跡、平出久保遺跡、宮脇遺跡〈17〉、永蔵寺遺跡〈18〉、東ノ越遺跡〈1〉、角来遺跡〈19〉、長泉寺遺跡〈20〉、北浦沿岸の台地上には新宮遺跡〈21〉、深山東端遺跡などが確認されている。平出久保遺跡では2軒<sup>18)</sup>、坂戸遺跡では3軒の竪穴住居跡が調査されている<sup>19)</sup>。

中世では城館跡が主であり、常陸大掾氏の支族である鹿島氏一族の徳宿親幹が同地に居館を構え本拠としたことに始まる徳宿城跡は、応仁2（1468）年の徳宿合戦で落城したといわれている<sup>20)</sup>。畑田城跡〈22〉は、12世紀末に徳宿秀幹の子畑田朝秀が鹿島郡内の畑田・大和田・富田・生井沢の4か村を支配したことに始まり、天正19（1591）年に落城したといわれている<sup>21)</sup>。確認された縄張りには、主郭を中心にして周囲に複数の郭を配置して防御性を高めていた戦国期の城郭とすることができ、1989年の調査では外堀の一部とみられる堀跡1条が確認されている<sup>22)</sup>。そのほか、富士山館跡〈23〉、塙館跡〈24〉、母貝館跡〈25〉、馬場館跡〈26〉、大樋上館跡<sup>23)</sup>〈27〉、金色館跡〈28〉、勧請地館跡〈29〉、龍ヶ谷館跡〈30〉は、それぞれ畑田氏の有力家臣の居館跡とされ、塙八館と呼ばれている<sup>24)</sup>。三階城跡〈31〉は、同じく鹿島氏支族で、12世紀末頃から同地を支配した安房氏の居城とされている<sup>25)</sup>。また巴川流域には、武田通信の築いた野友城跡〈32〉や郷土館跡〈33〉などが位置している。

近世の遺跡としては、市北部の大川・紅葉地区に紅葉の勘十郎堀跡がある。宝永3（1706）年、水戸藩は大規模な藩営工事に着手し、松波勘十郎を中心に涸沼川から巴川流域の紅葉に至る堀割工事を行っている<sup>26)</sup>。これは涸沼から巴川を経て北浦に至る水運を利用して奥州諸藩の物資を江戸へ運ぶことが目的であったと考えられる。

## 註

- 1) 蜂須紀夫『地学のガイドシリーズ3 茨城県地学のガイド』コロナ社 1977年8月
- 2) 茨城県立歴史館『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年3月
- 3) 矢ノ倉正男・茂木悦男・成島一也「坂戸遺跡 主要地方道小川鉾田線当間交通安全施設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第180集 2001年3月
- 4) 齊藤弘道「県内貝塚における動物遺存体の研究（3）」『学術調査概報3』茨城県歴史館 1979年3月
- 5) 註4）に同じ
- 6) 註4）に同じ
- 7) 後藤義明「主要地方道茨城・鹿島線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 梨ノ子木久保遺跡 割り塚古墳」『茨城県教育財団文化財調査報告』第47集 1988年6月
- 8) 海老沢稔・松本裕治・川又清明・横倉要次「鹿島郡鉾田町浦房地遺跡調査報告」『婆良岐考古』第6号 婆良岐考古同人会 1984年4月
- 9) 註3）に同じ
- 10) 小松崎猛彦・吹野富美夫「主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 平出久保遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第98集 1994年9月
- 11) 高橋杏二・橋本勉「鹿島線関係遺跡発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』V 1978年3月
- 12) 註11）に同じ
- 13) 註10）に同じ
- 14) 茨城県立歴史館『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』1974年3月
- 15) 緑川正實「都市計画道路3・4・2鉾田環状線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 畑田川波遺跡 畑田城跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第68集 1991年3月
- 16) 註10）に同じ
- 17) 註3）に同じ
- 18) 註10）に同じ
- 19) 註3）に同じ
- 20) 鉾田町史編さん委員会『図説 ほこたの歴史』鉾田町 1995年12月
- 21) 註20）に同じ
- 22) 註15）に同じ
- 23) 蓼沼香未由「大樋上館跡一土砂採取事業に伴う発掘調査報告書一」『茨城県鉾田町文化財調査報告書』第8輯 1998年3月
- 24) 註20）に同じ
- 25) 註20）に同じ

# 第3章 調査の成果

## 第1節 遺跡の概要

東ノ越遺跡は、銚田市の中央部を南流する畑田川の支流である長茂川左岸の標高34～36mの台地上に立地している。

調査の結果、奈良時代と中世後半の集落跡が確認された。調査前の現況は山林と畑地である。

今回の調査で、奈良時代の竪穴住居跡5軒、中世の井戸跡2基、粘土貼り土坑3基などを確認した。奈良時代の集落跡は調査区の中央部で、中世の井戸跡や土坑は、調査区の東部で確認されている。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に9箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、土師器（坏・甕・甑）、須恵器（坏・蓋・壺・甕）、土師質土器（内耳鍋）、陶器（天目茶碗・小碗）、磁器、土製品（球状土錘・支脚）、石器（磨製石斧・磨石）、石製品（勾玉・砥石）、鉄滓などである。

## 第2節 基本層序

テストピットは調査区西部に設定した。地表面の標高は35.7mで、地表面から深さ2.6mまで掘削した。基本土層図を第3図に示した。

土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから11層に細分される。これらは、表土・関東ローム層・常総粘土層に分類され、第1層が表土（耕作土）、第2～9層が関東ローム層、第10層・第11層が常総粘土層に相当する。

第1層は、極暗褐色を呈する耕作土層で、ロームブロックを少量含み、粘性・締まりは弱い。層厚は28～75cmである。

第2層は、明褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりは普通である。層厚は30～50cmである。

第3層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性は普通で、やや強く締まる。層厚は34～53cmである。

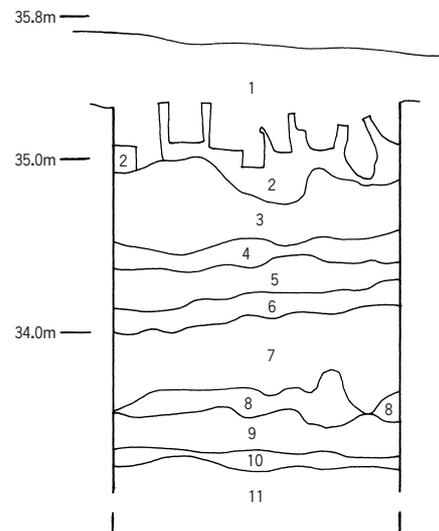
第4層は、褐色を呈するハードローム層で、白色粒子を少量含み、粘性・締まりが強い。層厚は6～18cmである。

第5層は、暗褐色を呈するハードローム層で、白色粒子を微量含み、粘性が強く、締まりは極めて強い。層厚は7～25cmである。

第6層は、褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子と白色粒子を極微量含み、粘性・締まりが極めて強い。層厚は10～15cmである。

第7層は、暗褐色を呈するハードローム層で、白色粒子を微量含み、粘性が極めて強く、締まりは強い。層厚は34～60cmである。

第8層は、明褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を少量含み、粘性・締まりが極めて強い。層厚は1



第3図 基本土層図

～32cmである。

第9層は、明褐色を呈するローム層で、黒色粒子を微量含み、粘性が極めて強く、締まりは普通である。層厚は14～27cmである。

第10層は、明黄褐色を呈するローム層から粘土層への漸移層で、黒色粒子を少量含み、粘性が極めて強く、締まりは普通である。層厚は3～8cmである。

第11層は、灰白色を呈する粘土層で、白色の砂粒を微量に含んでいる。粘性が極めて強く、締まりが強い。下層は未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構の多くは第2層上面で確認された。

### 第3節 遺構と遺物

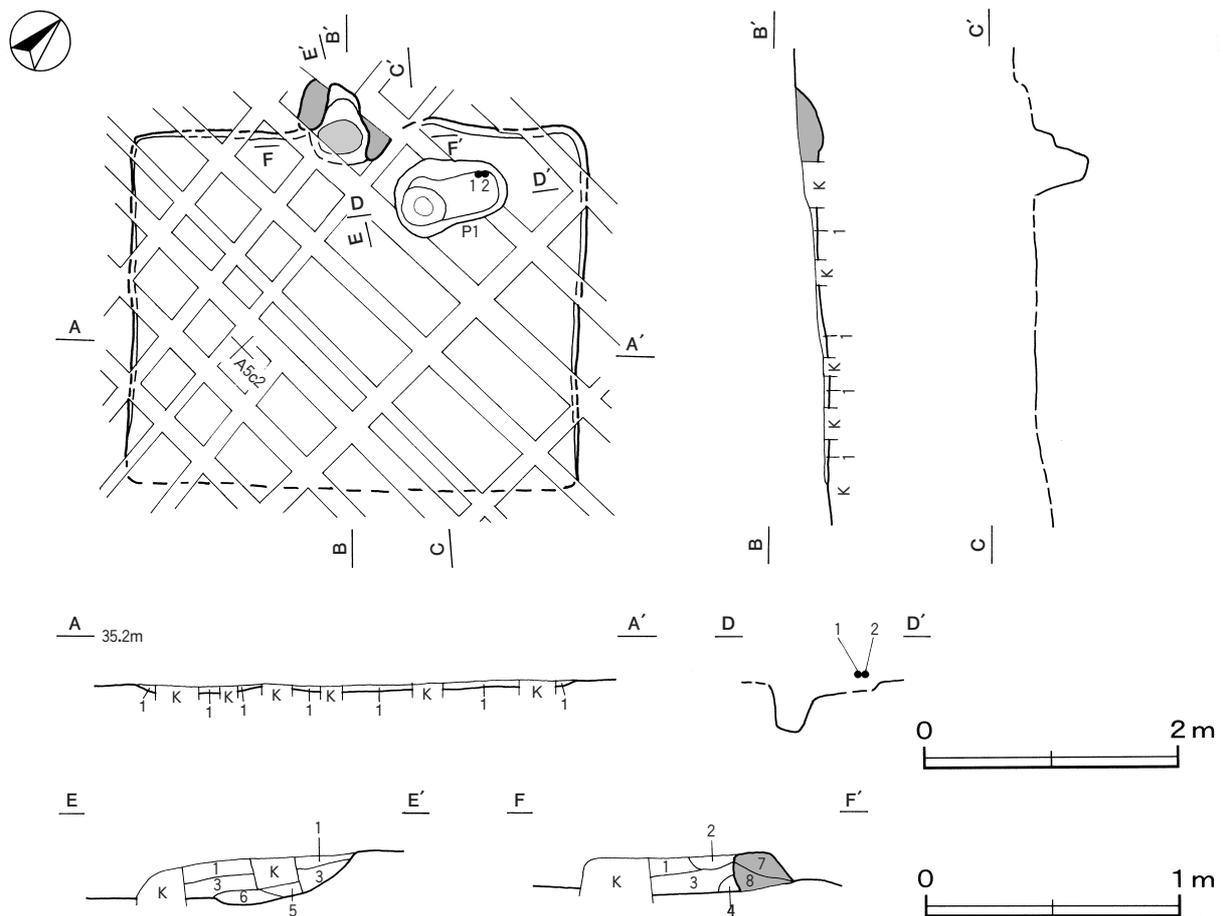
#### 1 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は竪穴住居跡5軒が確認されている。以下遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

#### 第2号住居跡（第4・5図）

位置 調査区中央部のA 5 b1区、標高35mの平坦な台地縁辺部に位置している。



第4図 第2号住居跡実測図

**確認状況** 全面的に耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 長軸は3.62mで、短軸は2.89mだけが確認されている。平面形は、方形または長方形と推測され、主軸方向はN-43°-Wである。壁高は10cm未満で、外傾して立ち上がっている。

**床** 確認できた部分はほぼ平坦で、硬化面は認められない。

**竈** 北西壁のほぼ中央部に付設されている。左袖部は攪乱を受けており、確認できた規模は焚口部から煙道部まで66cm、袖部幅52cmである。袖部は、床面とほぼ同じ高さの地山に砂質粘土を含んだ第7・8層を積み上げて構築されている。火床部は、床面をわずかに掘りくぼめており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁を30cmほど掘り込み、緩やかに立ち上がっている。

**竈土層解説**

- |        |                      |        |                       |
|--------|----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量    | 5 灰褐色  | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 灰赤色  | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量              |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量       | 7 灰赤色  | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量      |
| 4 灰褐色  | 焼土粒子・砂質粘土粒子少量        | 8 褐色   | ローム粒子・砂質粘土粒子少量        |

**ピット** 深さ42cmで、性格は不明である。

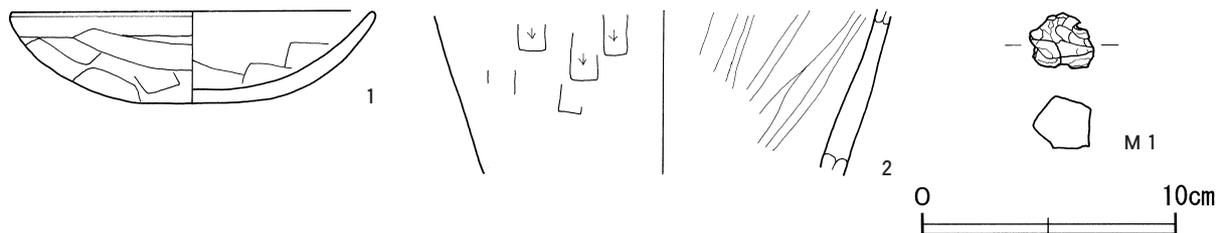
**覆土** 単層である。層厚が薄いために、堆積状況は不明である。

**土層解説**

- 1 褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片16点（坏4，甕3，不明9），鉄滓1点が出土している。1と2は竈東側の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から8世紀第1四半期と考えられる。



第5図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.3	3.6	-	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部内・外面ヘラナデ	覆土下層	50% PL6
2	土師器	甕	-	(6.5)	-	石英・長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鉄滓	2.2	2.5	2.0	14.5	鉄	着磁性有り	覆土中	

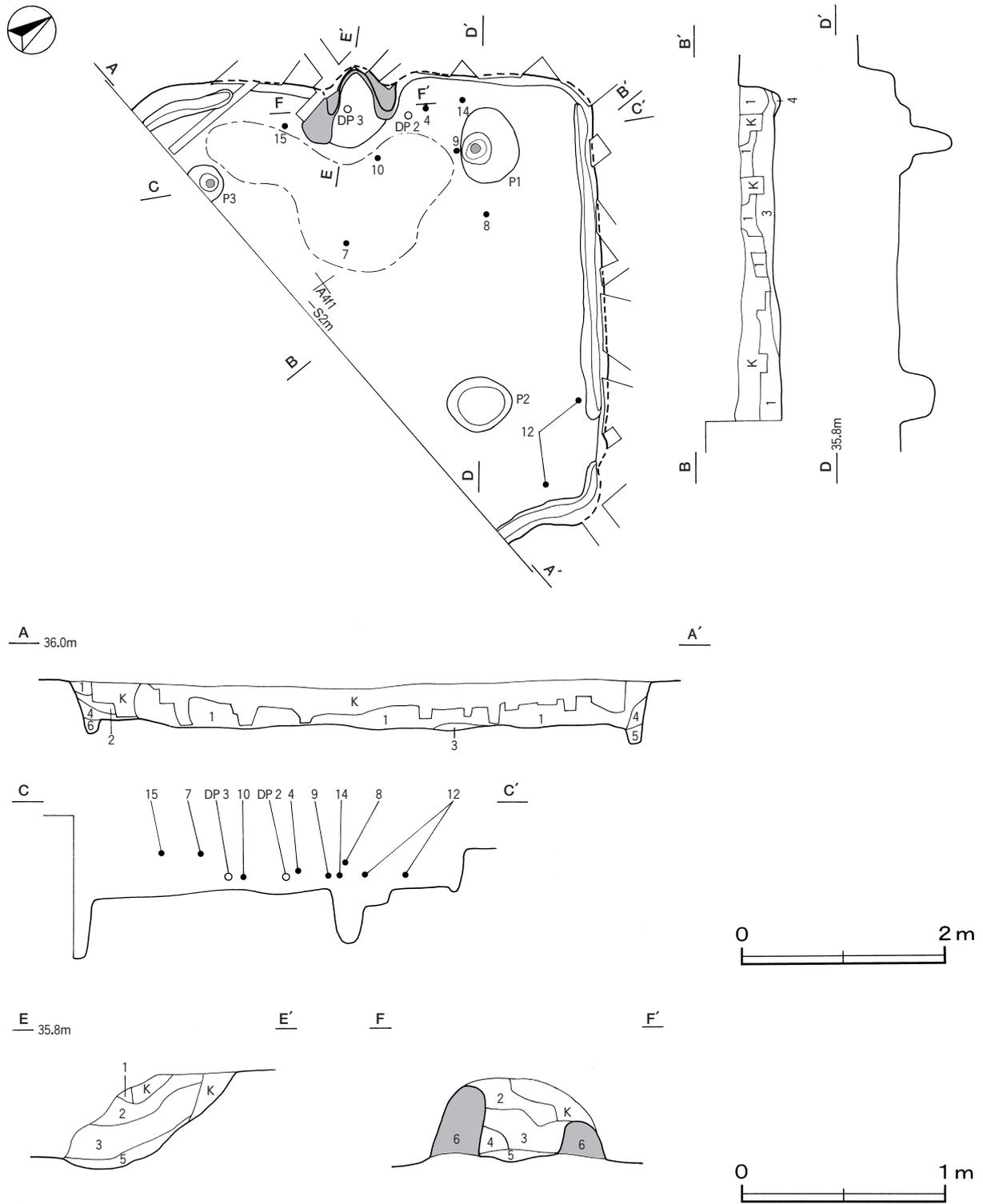
**第3号住居跡（第6～8図）**

**位置** 調査区中央部のA4f1区、標高35mの平坦な台地上に位置している。

**確認状況** 全面的に耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 南部が調査区域外に伸びており、長軸4.56m、短軸は4.45mだけが確認されている。平面形は方形と推測され、主軸方向はN-56°-Wである。壁高は40~48cmで、直立している。

**床** 平坦で、竈前面付近が踏み固められている。壁溝が、北西壁下と、南東コーナー壁下を除いて確認されている。



第6図 第3号住居跡実測図

**竈** 北西壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで78cm，袖部幅85cmである。袖部は5～10cmほど掘り残した地山を基部として砂質粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用しており，明確な火床面は確認できなかった。煙道部は壁を20cmほど掘り込み，外傾して立ち上がっている。

**竈土層解説**

- |        |                                |        |                              |
|--------|--------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色  | ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量     | 4 灰赤褐色 | 砂質粘土粒子中量，焼土粒子少量              |
| 2 黒褐色  | 砂質粘土粒子多量，焼土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子微量   | 5 暗褐色  | 焼土粒子・炭化粒子中量，砂質粘土粒子少量，ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 砂質粘土粒子多量，焼土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色  | 砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 |

**ピット** 3か所。P1～P3は，深さ45～56cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。

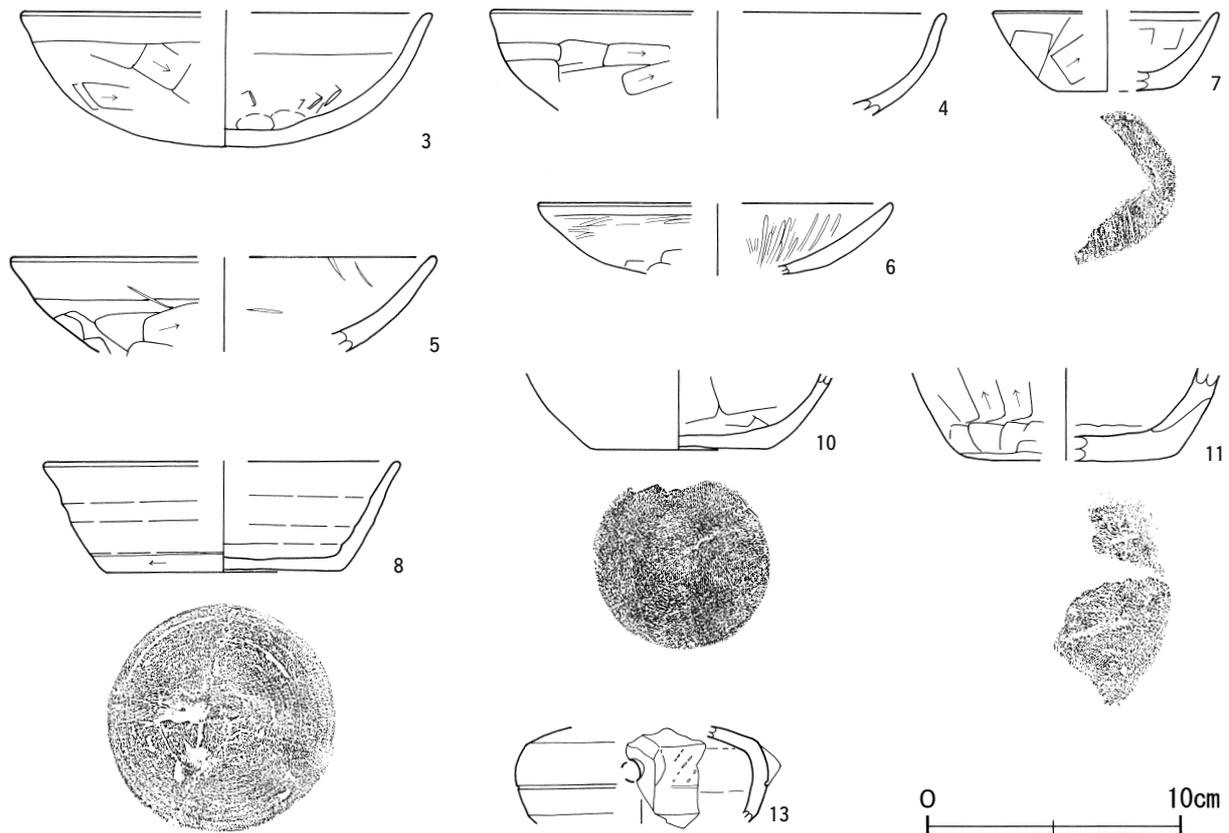
**覆土** 6層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

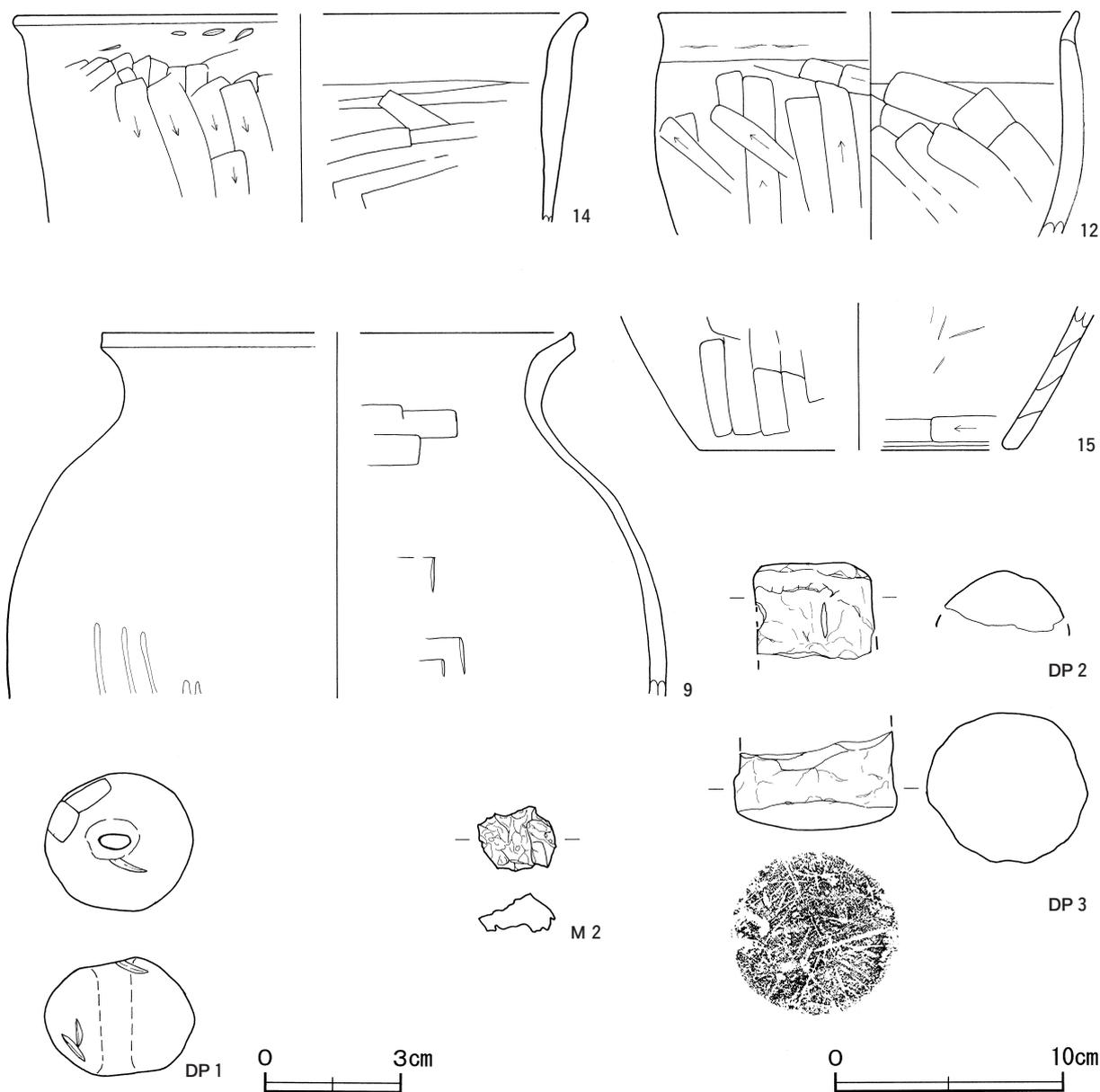
- |       |                |       |                |
|-------|----------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 褐色  | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 褐色  | ロームブロック中量      | 5 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量   |
| 3 褐色  | ロームブロック多量      | 6 褐色  | ローム粒子中量，炭化粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器片177点（坏118，甕48，甗11），須恵器片2点（坏），土製品3点（球状土錘1，支脚2），粘土塊7点，鉄製品1点（不明）が出土している。口縁や底部などから推測される土器の個体数は土師器坏12点，甕3点，甗7点，須恵器坏2点である。遺物は，小片が上層から下層にかけて散在して出土しており，8・10・13については攪乱を受けて混入したものと考えられる。

**所見** 時期は，出土土器から8世紀第1四半期と考えられる。



第7図 第3号住居跡出土遺物実測図（1）



第8図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表(第7・8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
3	土師器	坏	[16.1]	5.5	—	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら割り 内面へらナデ 見込み部指頭圧痕	覆土中	20%
4	土師器	坏	[18.0]	(4.1)	—	砂粒	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら割り 内面へらナデ	覆土中層	30%
5	土師器	坏	[16.8]	(3.8)	—	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら割り 内面へらナデ	覆土中	10%
6	土師器	坏	[14.0]	(2.8)	—	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら割り後へら磨き 内面へら磨き	覆土中	10%
7	土師器	坏	[9.2]	(3.2)	5.0	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面～底部へら割り 内面へらナデ	覆土上層	50% PL 6
8	須恵器	坏	[13.8]	4.4	9.2	石英・長石・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 外面下端回転へら割り 底部回転へら切り後回転へら割り	覆土中層	40% PL 6
9	土師器	甕	[20.5]	(16.2)	—	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面下半へら磨き 内面へらナデ	覆土下層	10%
10	土師器	坏	—	(3.2)	7.0	長石・海綿骨針	橙	普通	体部外面へら割り(摩滅) 内面へらナデ	覆土下層	40%
11	土師器	甕	—	(3.6)	[8.3]	石英・長石・雲母	褐	普通	体部外面へら割り 内面へらナデ 底部へら割り	覆土中	5%
12	土師器	甕	[18.3]	(10.0)	—	石英・長石・海綿骨針・砂粒	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら割り 内面へらナデ	覆土下層	20%
13	須恵器	甕	—	(3.8)	—	石英・長石	灰白	良	体部内・外面ロクロナデ 外面下刺突文 端へら割り 注口部貼り付け	覆土中層	5%

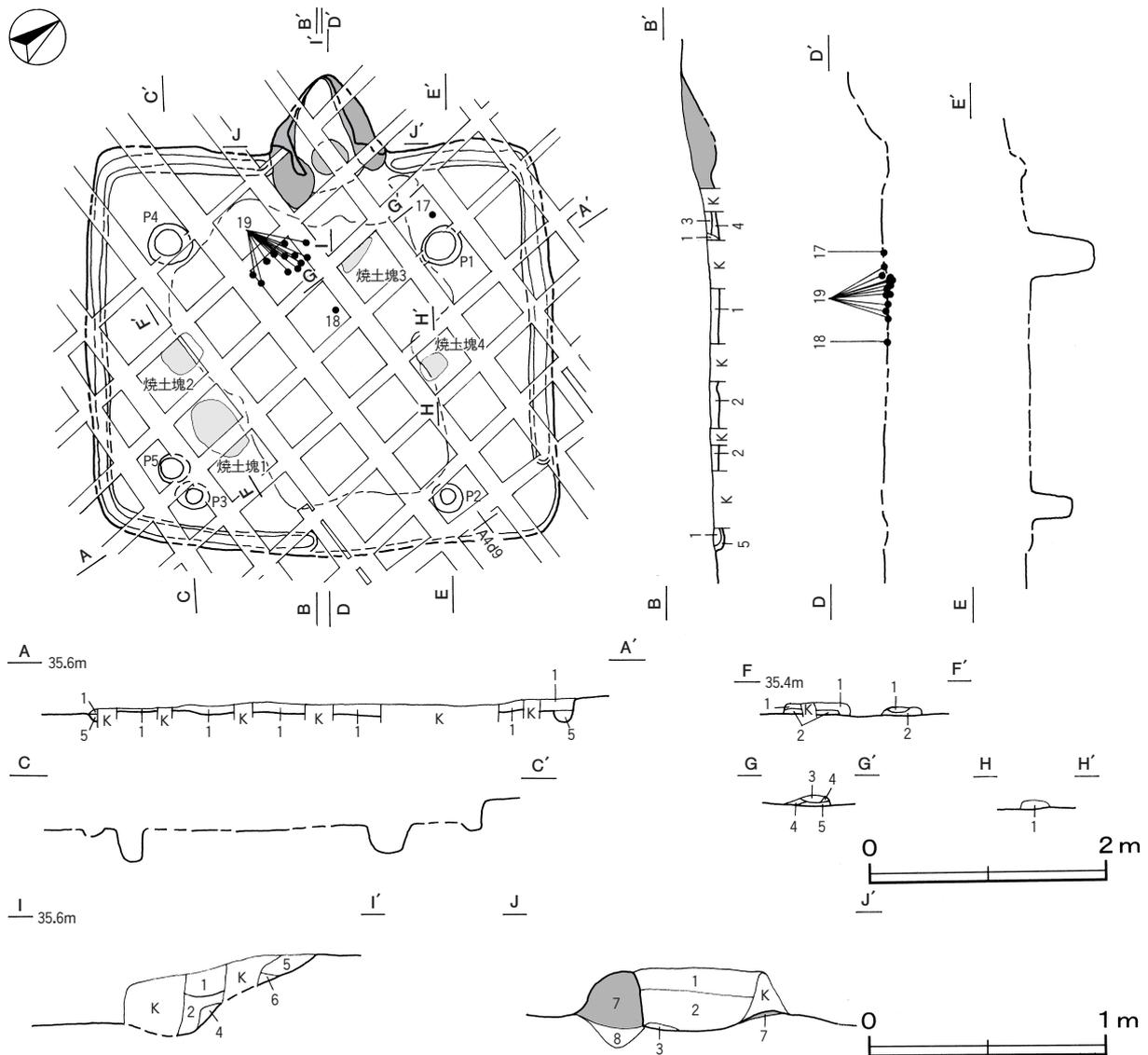
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
14	土師器	甌	[24.8]	(9.2)	—	石英・長石	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土下層	5%
15	土師器	甌	—	(6.5)	[13.8]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 下端ヘラ削り	覆土上層	5%

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	球状土錘	2.6	3.2	3.1	24.8	長石	両端より穿孔 孔径0.7cm	覆土中	PL 6
DP2	支脚	(4.2)	[5.0]	—	(67.4)	砂粒	ナデ調整 DP3と同一個体カ	覆土中層	
DP3	支脚	(4.3)	7.4	—	(192.2)	砂粒・赤色粒子	ナデ調整 底部木葉痕 DP2と同一個体カ	竈覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	鉄滓	2.8	3.4	1.7	18.4	鉄	着磁性弱	覆土中	

### 第5号住居跡 (第9・10図)

位置 調査区中央部のA 4 c8区, 標高35mの平坦な台地上の縁辺部に位置している。



第9図 第5号住居跡実測図

**確認状況** 全面的に耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 長軸3.98m，短軸3.44mの長方形で，主軸方向はN-56°-Wである。壁高は5～10cmで，ほぼ直立している。

**床** 平坦で，中央部から竈前面にかけて踏み固められている。壁溝は，東コーナー付近壁下を除いて確認されている。床面直上で4か所の焼土塊が確認されている。

**焼土塊1～4土層解説**

- |          |                        |                 |
|----------|------------------------|-----------------|
| 1 暗赤褐色   | 焼土粒子・炭化粒子中量，ロームブロック微量  | 粒子少量            |
| 2 極暗赤褐色  | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量    | 4 灰赤色           |
| 3 にぶい赤褐色 | 焼土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子・砂質粘土 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子中量 |
|          |                        | 5 暗赤褐色          |
|          |                        | 焼土ブロック少量        |

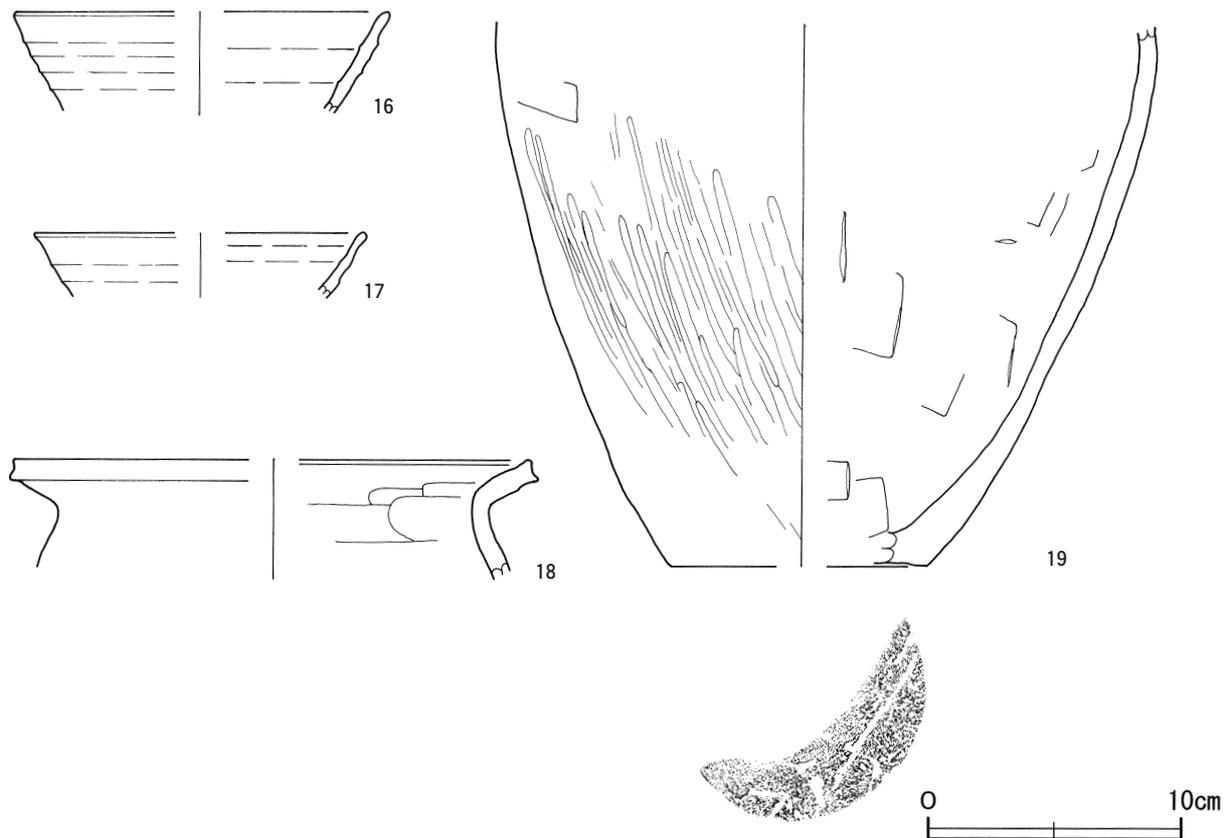
**竈** 北西壁中央部に付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで95cm，袖部幅97cmである。右袖部は5cmほど掘り残した地山を基部とし，左袖部は地山を8cmほど掘り窪めた後黒色土を埋土して，それぞれ砂質粘土を含んだ第7層を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用しており，火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁を60cmほど掘り込み，緩やかに立ち上がっている。

**竈土層解説**

- |        |                                  |        |                              |
|--------|----------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗灰黄色 | 砂質粘土粒子多量，炭化粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量 | 5 褐色   | ロームブロック中量，炭化粒子微量             |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量，砂質粘土粒子少量            | 6 赤褐色  | 焼土ブロック多量，炭化粒子少量              |
| 3 褐色   | ロームブロック中量                        | 7 暗灰黄色 | 砂質粘土粒子多量，焼土粒子少量，ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色  | 砂質粘土粒子多量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量     | 8 黒褐色  | ローム粒子少量                      |

**ピット** 5か所。P1～P4は，深さ25～56cmで，規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ11cmで，性格不明である。

**覆土** 5層に分層されるが，層厚が薄く攪乱が著しいことから堆積状況は不明である。



第10図 第5号住居跡出土遺物実測図

**土層解説**

1 暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐 色	焼土粒子・粘土粒子多量, 炭化粒子中量, ローム粒子少量
2 暗 褐 色	炭化物多量, 焼土粒子中量, ローム粒子微量	5 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗 褐 色	焼土ブロック・炭化物多量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量		

**遺物出土状況** 土師器片69点（坏4，甕65），須恵器片13点（坏6，蓋2，甕5）が出土している。口縁や底部等から推測される土器の個体数は，土師器坏1点，甕2点，須恵器坏4点，蓋1点，甕1点である。土器は，竈前面付近の床面直上から多く出土している。

**所見** 時期は，床面直上から出土した土器から8世紀第3四半期と考えられる。覆土中に多くの焼土塊や炭化物が混入しており，焼失した住居と考えられる。

**第5号住居跡出土遺物観察表（第10図）**

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	須恵器	坏	[14.7]	(4.1)	—	石英・長石・雲母	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	覆土上層	5%
17	須恵器	坏	[13.0]	(2.6)	—	石英・長石・雲母	黄灰	普通	体部内・外面ロクロナデ	床面直上	5%
18	土師器	甕	[20.4]	(4.9)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 頸部内面ヘラナデ	床面直上	5%
19	土師器	甕	—	(21.5)	[10.2]	石英・長石	にぶい黄褐	普通	体部外面ヘラ磨き 内面ヘラナデ 底部木葉痕	床面直上	30% PL7

**第6号住居跡（第11・12図）**

**位置** 調査区中央部のA 5 d3区，標高35mの台地縁辺部に位置している。

**確認状況** 全面的に耕作による攪乱を受けている。

**規模と形状** 長軸3.85m，短軸3.76mの方形で，主軸方向はN-33°-Wである。壁高は25~45cmで，直立している。

**床** 平坦で，中央部から壁際にかけて踏み固められている。壁溝は，南壁部を除いて確認されている。

**竈** 北西壁のやや東寄りに付設されている。規模は，焚口部から煙道部まで89cm，袖部幅120cmである。袖部は床面とほぼ同じ高さの平坦部に砂質粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さの平坦面を使用しており，火床面は明確ではない。煙道部は壁を20cmほど掘り込み，外傾して立ち上がっている。

**竈土層解説**

1 暗 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	7 褐 色	焼土ブロック中量, 砂質粘土粒子少量
2 灰 褐 色	砂質粘土粒子中量, 焼土ブロック・炭化物少量	8 灰 褐 色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3 暗 赤 褐 色	焼土粒子中量, ローム粒子少量	9 褐 色	砂質粘土粒子極多量, 炭化粒子中量, 焼土粒子少量, ローム粒子微量
4 暗 赤 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・砂質粘土粒子少量	10 暗 褐 色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子極微量
5 褐 色	ローム粒子中量, 炭化粒子・砂質粘土粒子少量		
6 灰 褐 色	ロームブロック・砂質粘土粒子中量		

**ピット** 5か所。P 1~P 4は，深さ22~43cmで，規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ14cmで，出入り口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 3層に分層される。第1層にロームブロックを少量含むことから，人為堆積と考えられる。

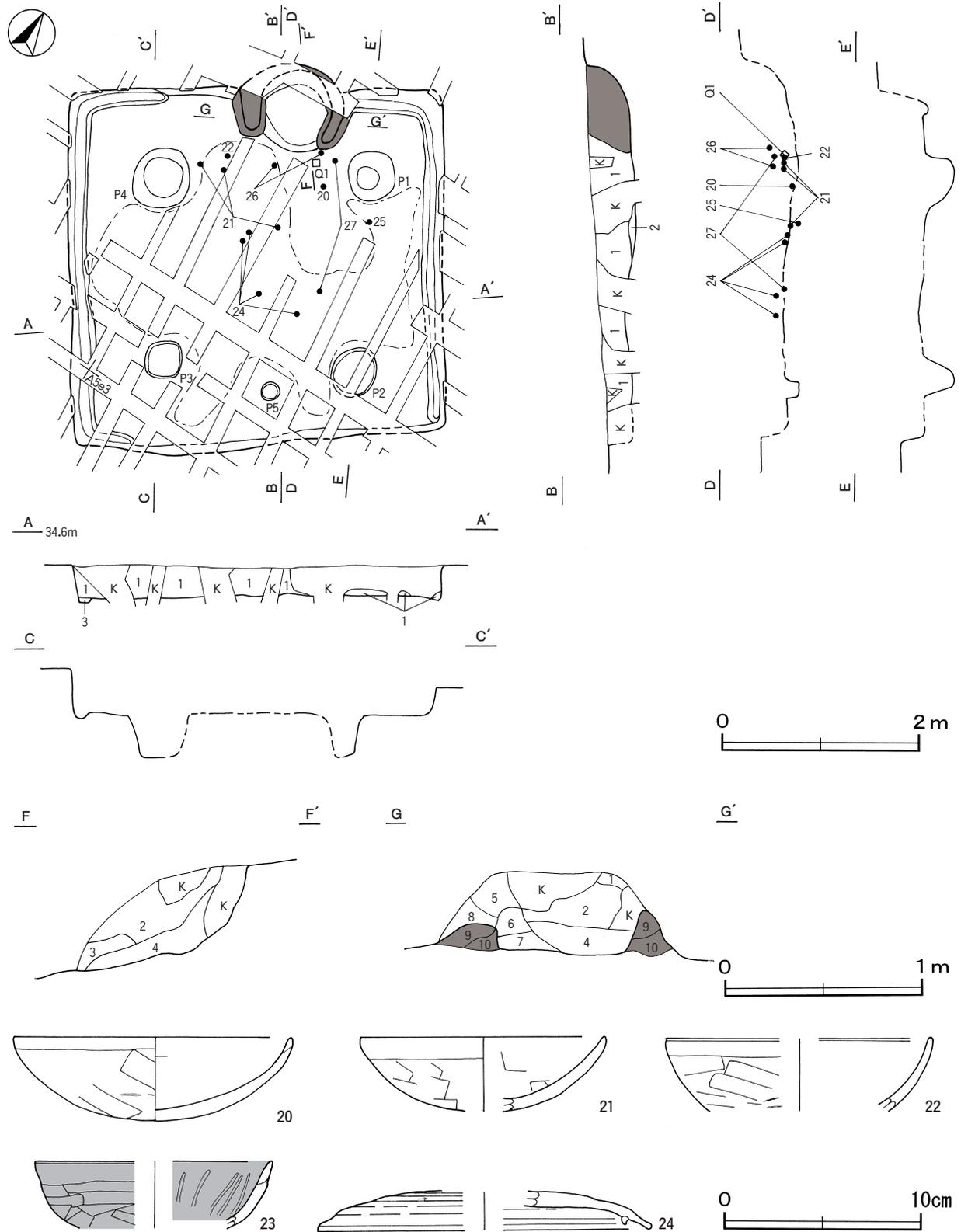
**土層解説**

1 暗 褐 色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	3 褐 色	ロームブロック少量
2 暗 褐 色	焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量, ローム粒子微量		

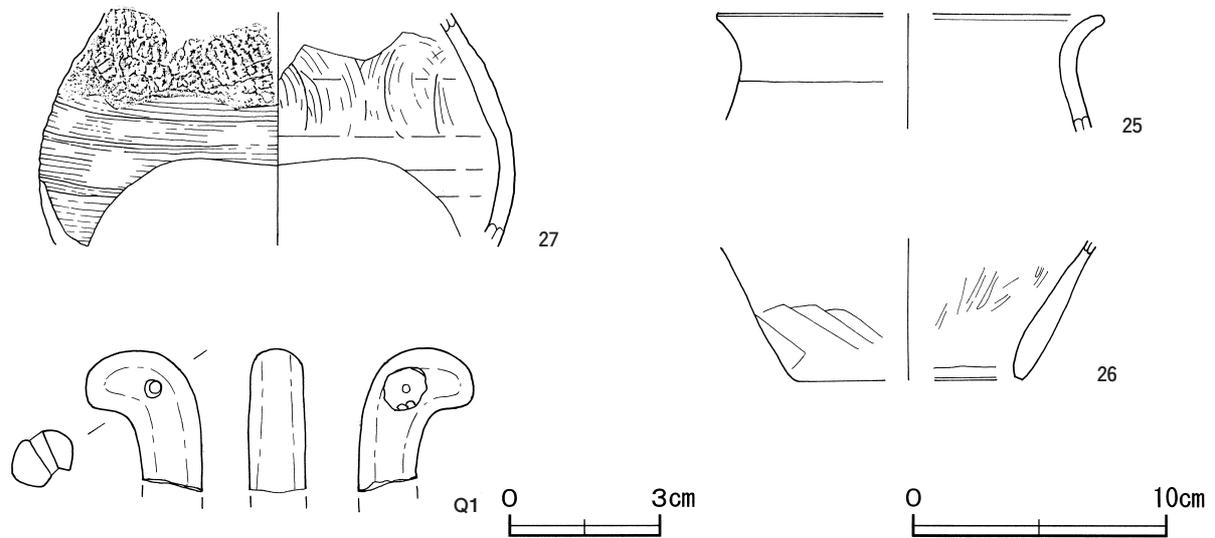
**遺物出土状況** 土師器片119点（坏31，甕87，甗1），須恵器片12点（蓋6，壺2，甕4），石製品1点（勾玉），鉄滓1点，混入した陶器片2点も出土している。口縁や底部などから推測される土器の個体数は，土師器坏5

点、甕2点、甗1点、須恵器蓋1点、壺1点である。遺物は、竈周辺の覆土中層から床面直上にかけて多く出土しており、住居廃絶後に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から8世紀第1四半期と考えられる。



第11図 第6住居跡・出土遺物実測図



第12図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第11・12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師器	坏	14.0	4.3	—	石英・砂粒	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら削り後ナデ 内面へらナデ	床面直上	50%
21	土師器	坏	12.6	(3.8)	—	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら削り内面へらナデ	覆土下層	50% PL 6
22	土師器	坏	[13.6]	(3.8)	—	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へら削り内面へらナデ	覆土下層	5%
23	土師器	坏	[12.0]	(3.4)	—	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ 体部外面へらナデ内面へらナデ後へら磨き	覆土下層	5%
24	須恵器	蓋	[16.8]	(2.0)	—	石英・長石	灰	普通	体部内・外面ロクロナデ 天井部回転へら削り	覆土中～下層	30%
25	土師器	甕	[15.6]	(4.7)	—	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ	床面直上	5%
26	土師器	甌	—	(5.6)	[9.0]	石英・長石・雲母	橙	普通	体部外面へら削り 内面へら磨き 下端へら削り	覆土中層	5%
27	須恵器	壺	—	(8.3)	—	長石	灰	普通	体部外面下半カキ目後上半擬格子状叩き目内上半面同心円状の当て具痕	覆土中～下層	5% PL 6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	勾玉	(2.8)	(2.4)	1.15	(7.65)	瑪瑙	全面研磨調整 両面より穿孔 下端欠損	覆土下層	PL 8

### 第7号住居跡（第13図）

**位置** 調査区中央部のA 4 c0区、標高35mの平坦な台地の縁辺部に位置している。

**確認状況** 耕作による削平を受けており、竈の一部と硬化面の一部が確認された。

**規模と形状** 確認された硬化面の範囲から、両軸4 m前後の方形もしくは長方形と推測される。

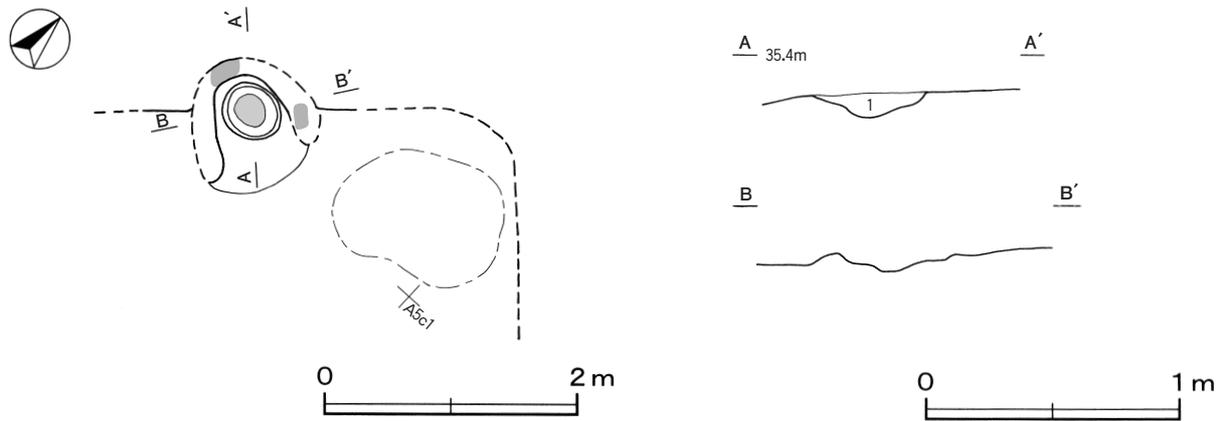
**床** 北東コーナー部付近とみられる部分から、長径136cm、短径105cmの楕円形の範囲で硬化面が確認された。

**竈** 火床面とみられる焼土範囲と、袖部の構築材の粘土範囲が確認されている。火床部は直径42cmの円形で、深さ10cmほどの皿状に掘りくぼめられ、火を受けて赤変硬化している。

#### 電土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量

**所見** 遺物は出土していないが、隣接する住居跡がいずれも8世紀代であることから、時期は8世紀代と推定される。



第13図 第7号住居跡実測図

表2 奈良時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	竈	貯蔵穴				
2	A 5 b1	N-43°-W	[方形・ 長方形]	3.62 × (2.89)	0~10	平坦	-	-	-	1	1	-	不明	土師器 (坏, 甕)	8世紀第1四半期	
3	A 4 f1	N-56°-W	方形	4.56 × 4.45	40~48	平坦	一部	3	-	-	1	-	人為	土師器 (坏, 甕, 甌) 須恵器 (坏)	8世紀第1四半期	
5	A 4 c8	N-56°-W	長方形	3.98 × 3.44	5~10	平坦	一部	4	-	1	1	-	不明	土師器 (坏, 甕) 須恵器 (坏, 蓋)	8世紀第3四半期	
6	A 5 d3	N-33°-W	方形	3.85 × 3.76	25~45	平坦	一部	4	1	-	1	-	人為	土師器 (坏, 甕) 須恵器 (盖) 勾玉	8世紀第1四半期	
7	A 4 c0	-	[方形・ 長方形]	4 m 前後 × 4 m 前後	-	平坦	-	-	-	-	1	-	不明		8世紀代	

## 2 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は井戸跡2基，粘土貼り土坑3基，土坑1基が確認されている。以下遺構と遺物について記述する。

### (1) 井戸跡

#### 第1号井戸跡 (第14図)

**位置** 調査区東部のA 6 d7区，標高34mの台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長径3.17m，短径2.94mの楕円形で，長径方向はN-48°-Eである。上部は，掘り鉢状に深さ136~156cmまで掘り込んだ後，下部は円筒状に掘り込んでいる。2.02mまで掘り下げたが，以下は湧水のため確認できなかった。

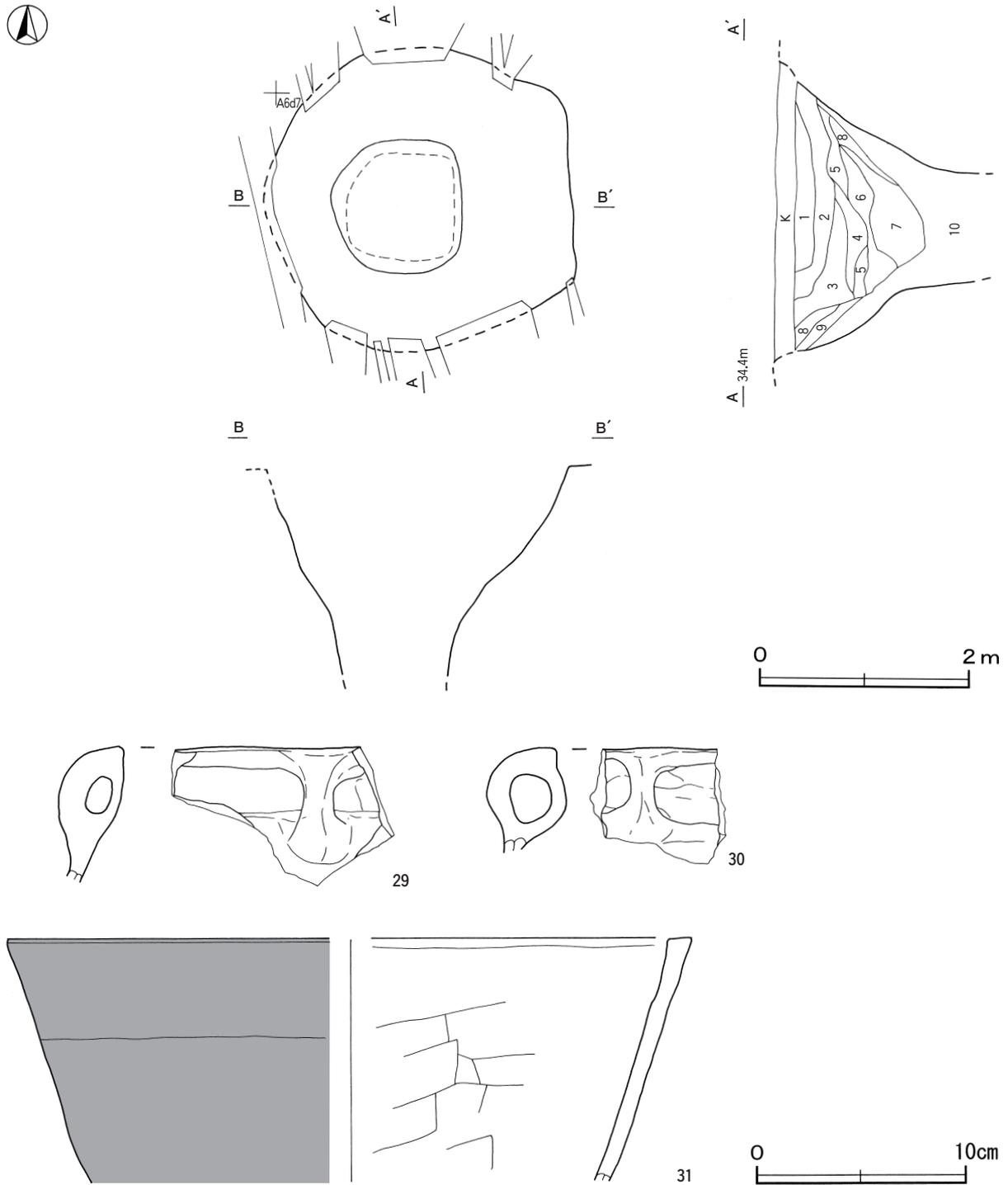
**覆土** 10層に分層される。各層にロームブロックを含み，ブロック状の堆積状況を示していることから，人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量	6	褐色	ロームブロック中量
2	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック中量，炭化粒子少量
3	黒褐色	ロームブロック少量	8	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
4	褐色	ロームブロック少量	9	褐色	ローム粒子少量
5	暗褐色	ロームブロック微量	10	褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師質土器片15点 (内耳鍋) が出土している。ほかに流れ込んだ土師器片7点 (甕) も出土している。

所見 素掘りの井戸跡である。廃絶時期は、出土土器から15～16世紀と考えられる。



第14図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	土師質土器	内耳鍋	—	(6.7)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	耳部貼り付け後ナデ調整	覆土中	5%
30	土師質土器	内耳鍋	—	(5.6)	—	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	耳部貼り付け後ナデ調整	覆土中	5%
31	土師質土器	内耳鍋	[33.0]	(11.7)	—	長石・雲母	にぶい褐	普通	体部内・外面ヘラナデ	覆土中	10%



第2号井戸跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	土師質土器	内耳鍋	—	(3.6)	—	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	耳部貼り付け後ナデ調整	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	鉄滓	3.6	4.3	2.7	39.9	鉄	着磁性弱い	覆土中	

表3 中世井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 時期・ 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ					
1	A 6 d7	N-48°-E	楕円形	3.17 × 2.94	(2.02)	漏斗	—	人為	土師質土器	15~16世紀
2	A 7 c6	N-72°-E	楕円形	2.64 × 2.36	(1.75)	漏斗	—	人為	土師質土器	16世紀中頃 SN1・2, SK99→本跡

(2) 粘土貼り土坑

第1号粘土貼り土坑（第16・17図）

**位置** 調査区東部のA 7 d6区，標高34mの平坦な台地上に位置している。

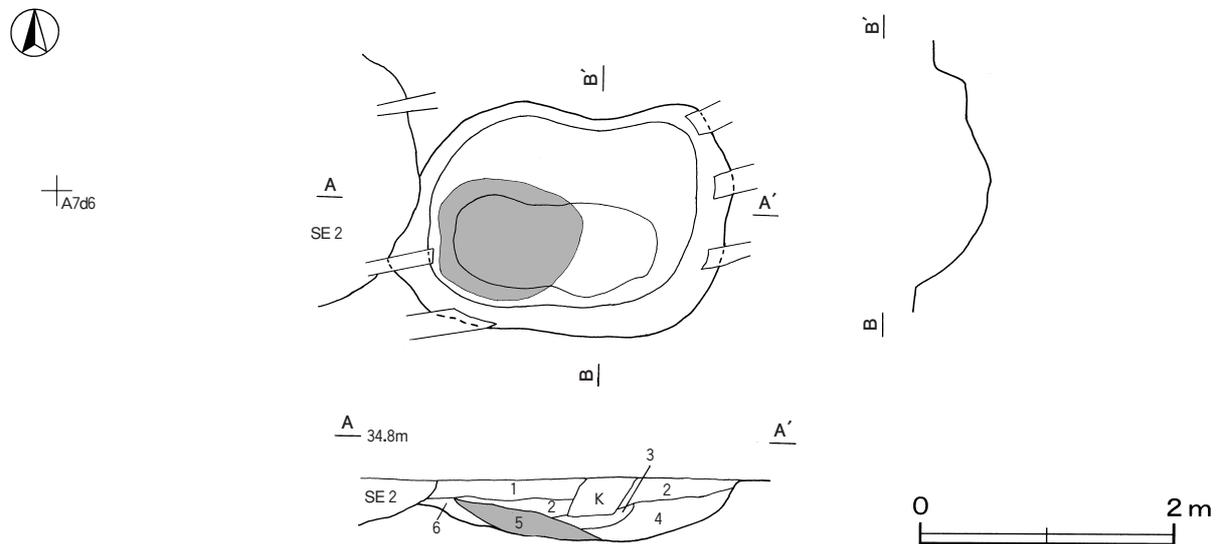
**重複関係** 第2号井戸に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径2.45m，短径1.80mの楕円形で，長径方向はN-90°である。深さ53cm，底面は皿状で，壁は緩やかに立ち上がっている。南西部の径0.95mの不整形形の範囲には，壁面から底面にかけて厚さ4~20cmの粘土が貼られている。

**覆土** 6層に分層される。第5層が粘土層である。ブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

**土層解説**

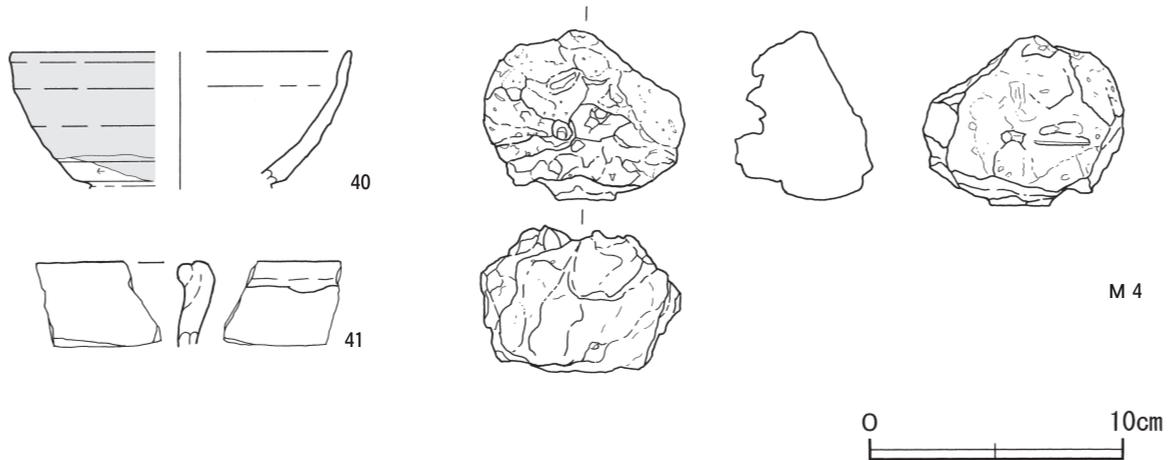
- |       |                   |       |                  |
|-------|-------------------|-------|------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 | 4 褐色  | ロームブロック中量，炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量 | 5 灰白色 | 粘土粒子多量，ローム粒子微量   |
| 3 明褐色 | ロームブロック多量，粘土粒子微量  | 6 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量     |



第16図 第1号粘土貼り土坑実測図

**遺物出土状況** 陶器片1点(天目茶碗), 土師質土器片6点(内耳鍋), 鉄滓1点が出土している。ほかに流れ込んだ土師器片1点(坏), 須恵器片1点(坏)も出土している。

**所見** 時期は, 出土土器から16世紀中頃と考えられる。西部で重複する第2号井戸跡とは明確な時期差がなく, 両遺構は同時期に併存していた可能性が高い。粘土を貼る構造ではあるが, 粘土範囲が部分的であり, いわゆる水溜めであったとは考えがたく, 井戸に伴う水利施設であったと推測される。



第17図 第1号粘土貼り土坑出土遺物実測図

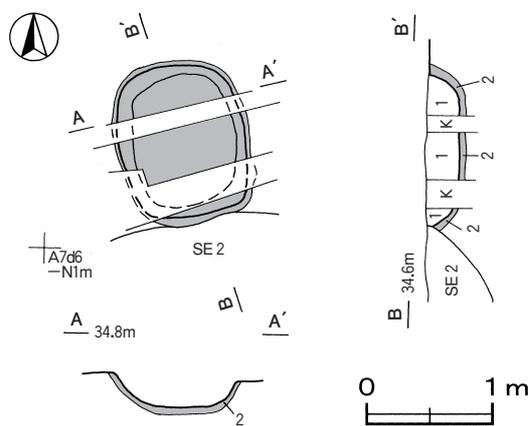
第1号粘土貼り土坑出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
40	陶器	天目茶碗	[13.4]	(5.4)	—	石英・鉄釉	胎:灰白 釉:黒褐	良好	ロクロ整形 体部外面下端回転ヘラ削り	覆土中	5% 瀬戸・美濃系
41	土師質土器	焙烙鍋	—	(3.3)	—	雲母	赤褐	普通	ナデ調整	覆土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	鉄滓	6.8	7.9	5.8	412	鉄	着磁性極めて弱い	覆土中	PL8

**第2号粘土貼り土坑(第18図)**

**位置** 調査区東部のA7c6区, 標高34mの平坦な台地上に位置している。



**重複関係** 第2号井戸に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.31m, 短軸1.04mの長方形で, 長軸方向はN-10°-Wである。深さ26cm, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。壁面から底面にかけて厚さ5~8cmの粘土が貼られている。

**覆土** 2層に分層され, 第2層が粘土層である。覆土にロームブロックを含む不均質な堆積状況から, 人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 灰白色 粘土粒子多量

第18図 第2号粘土貼り土坑実測図

**遺物出土状況** 土師質土器片1点（内耳鍋）が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。南部で重複する第2号井戸跡とは明確な時期差がなく、両遺構は同時期に併存していた可能性が高い。全面に粘土が貼られる構造から、水溜めなどの水利施設であったと考えられる。

### 第3号粘土貼り土坑（第19図）

**位置** 調査区東部のA7c7区、標高34mの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 南壁は攪乱を受けており、長軸は1.40m、短軸1.15mの長方形で、長軸方向はN-8°-Wである。深さ39cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。壁面から底面にかけて厚さ4～6cmの粘土が貼られている。

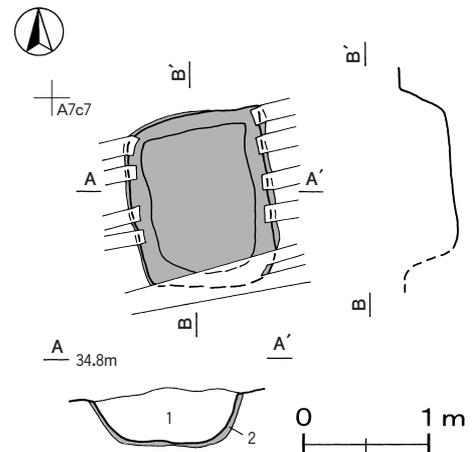
**覆土** 2層に分層され、第2層が粘土層である。覆土にロームブロックを含む不均質な堆積状況から、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量、粘土ブロック少量
- 2 褐灰色 粘土粒子多量

**遺物出土状況** 土師質土器片1点（内耳鍋）が出土している。ほかに流れ込んだ土師器片1点（甕）も出土している。

**所見** 時期は出土土器から、15～16世紀と考えられる。時期と形状が、西部に位置する第2号粘土貼り土坑と類似しており、近隣に井戸跡は確認できなかったが、水溜め等の水利施設であった可能性がある。



第19図 第3号粘土貼り土坑実測図

表4 中世粘土貼り土坑一覧表

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 時期・ 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
1	A7d6	N-90°	楕円形	2.45 × 1.80	53	緩斜	皿状	人為	土師質土器・陶器	16世紀中頃 本跡→SE2
2	A7c6	N-10°-W	長方形	1.31 × 1.04	26	外傾	平坦	人為	土師質土器	16世紀代 本跡→SE2
3	A7c7	N-8°-W	長方形	[1.40] × 1.15	39	外傾	平坦	人為	土師質土器	15～16世紀

### (3) 土坑

#### 第59号土坑（第20～24図）

**位置** 調査区東部のA6c6区、標高34mの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 北部が調査区域外に延び、長径2.50m、短径は1.75mだけが確認された。平面形は楕円形と推測され、長径方向はN-82°-Eである。深さ58cm、底面は平坦で、壁は直立している。

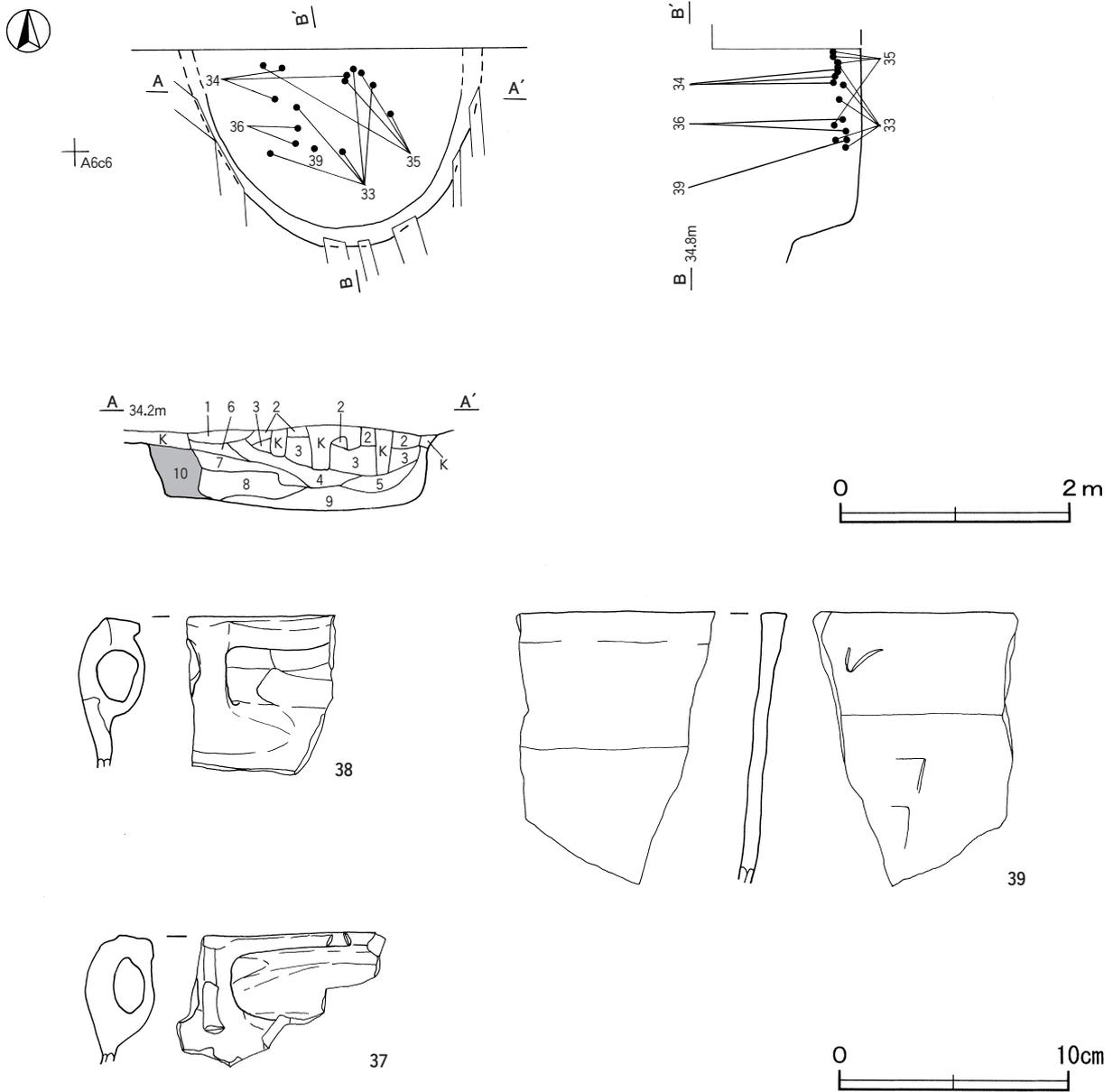
**覆土** 10層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

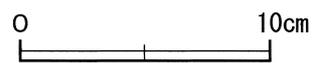
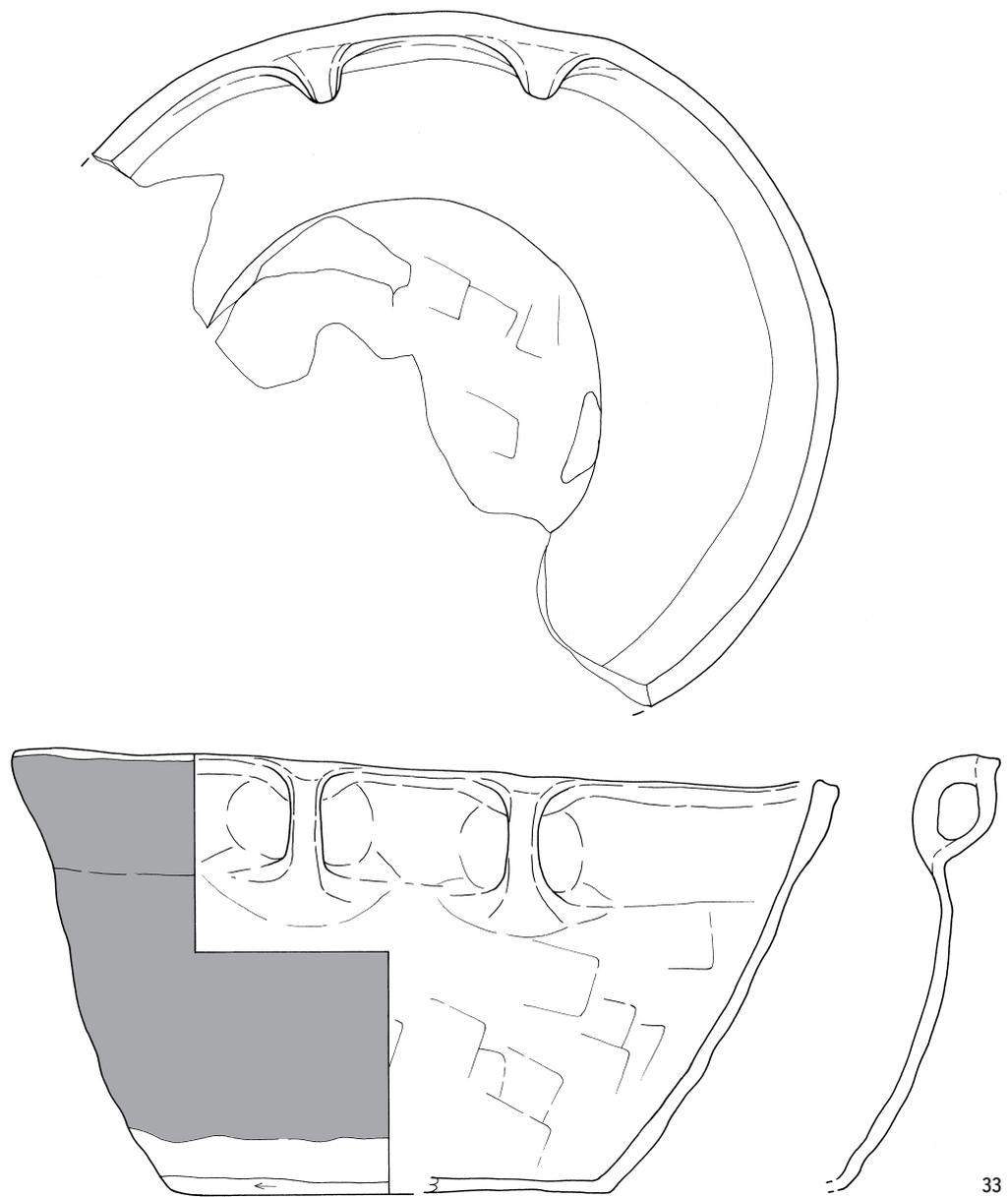
- |   |     |              |    |     |             |
|---|-----|--------------|----|-----|-------------|
| 1 | 褐色  | ローム粒子中量      | 6  | 暗褐色 | ロームブロック中量   |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 7  | 褐色  | ロームブロック中量   |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子少量      | 8  | 暗褐色 | ローム粒子中量     |
| 4 | 暗褐色 | ロームブロック少量    | 9  | 暗褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 |
| 5 | 褐色  | ロームブロック少量    | 10 | 灰褐色 | 粘土粒子多量      |

**遺物出土状況** 土師質土器片59点（内耳鍋）が出土している。土器片は覆土中層で散在して出土しており，廃絶後に一括して廃棄されたものと考えられる。

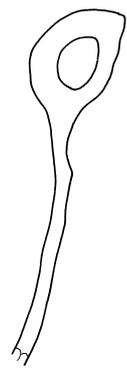
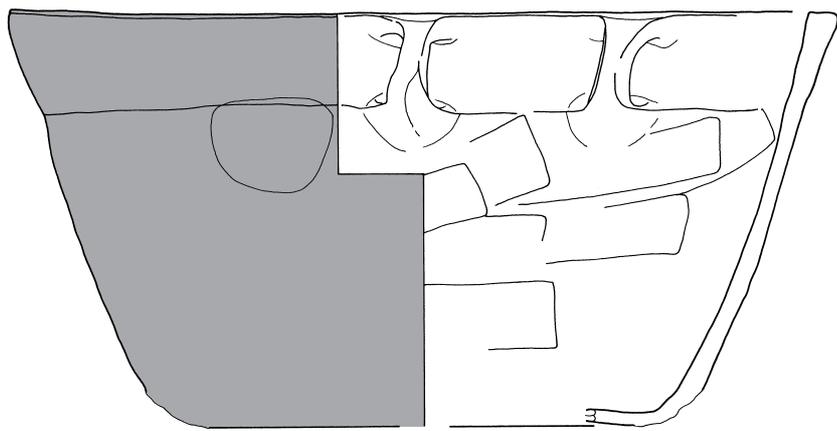
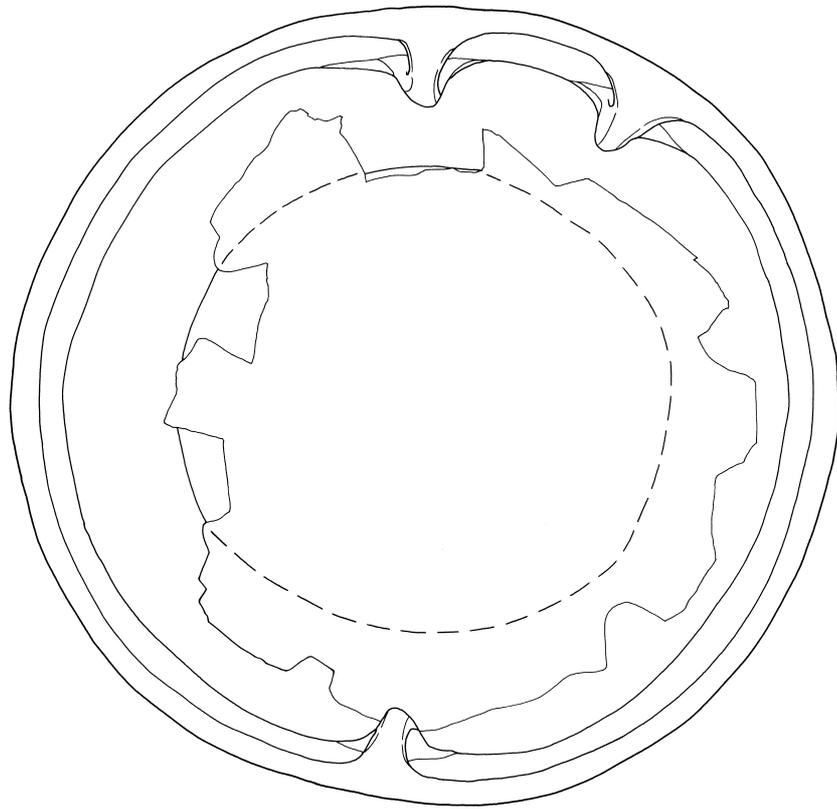
**所見** 時期は，出土土器から15世紀代と考えられる。覆土の第10層は粘土層であり，粘土範囲を平面的にとらえることはできなかったが粘土貼り土坑の可能性が考えられる。7個体以上の内耳鍋が破片で投棄されており，廃絶後に廃棄土坑として使用されたと考えられる。



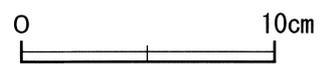
第20図 第59号土坑・出土遺物実測図



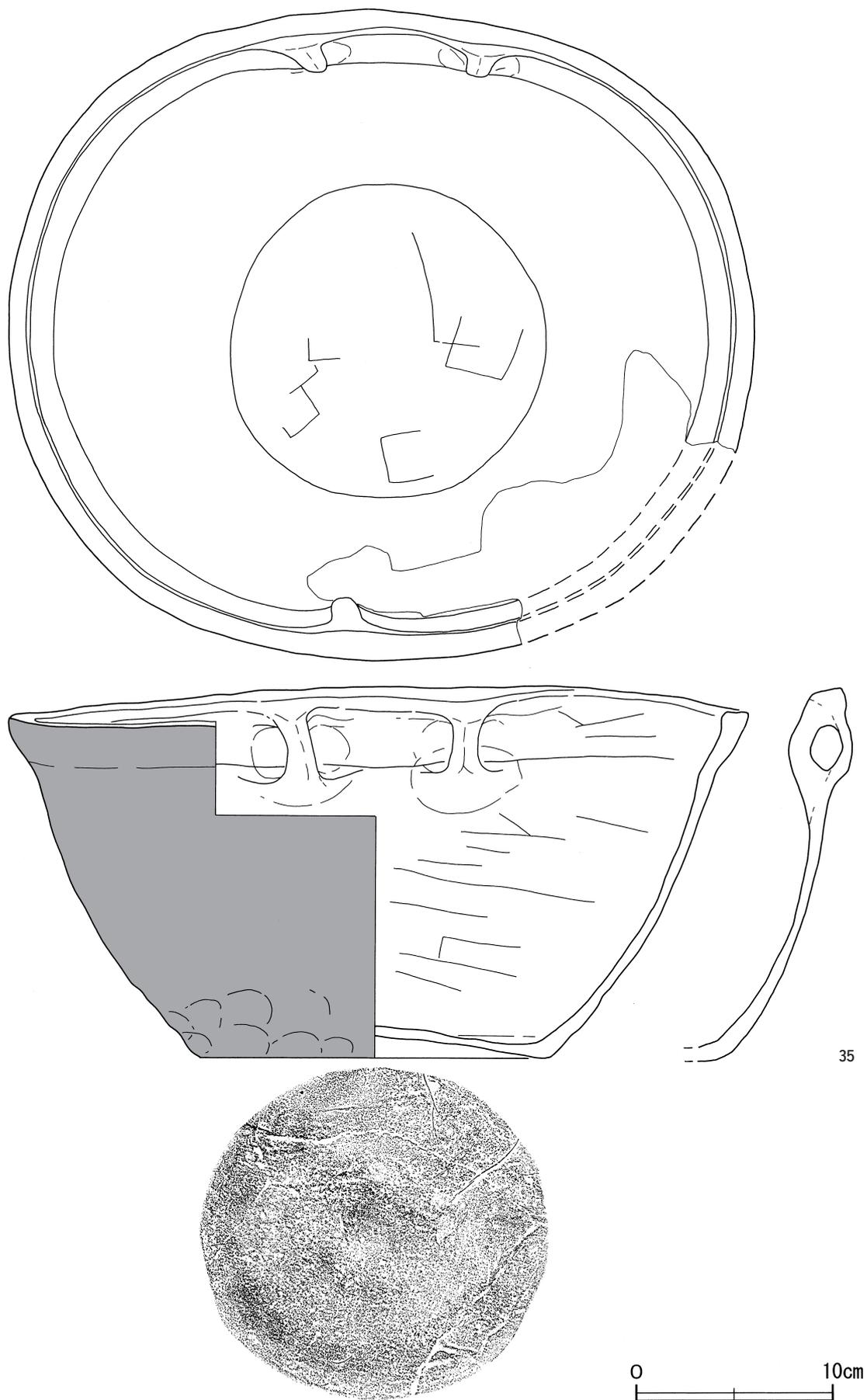
第21图 第59号土坑出土遗物实测图(1)



34

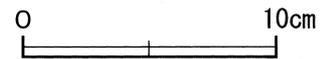
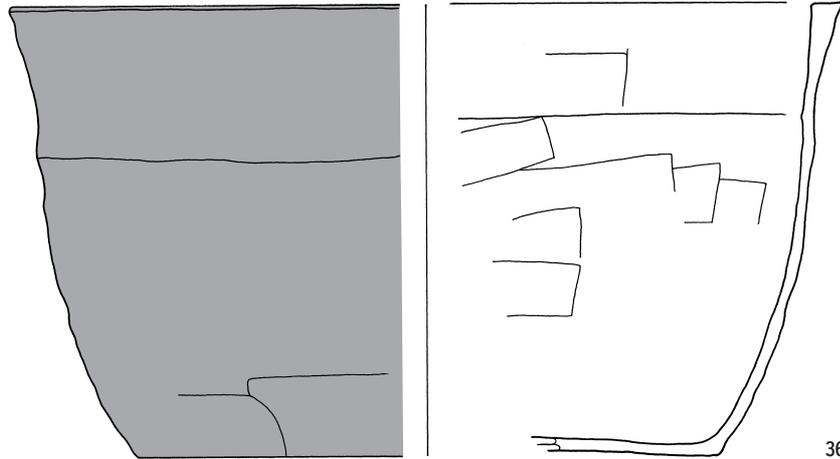


第22図 第59号土坑出土遺物実測図(2)



35

第23図 第59号土坑出土遺物実測図(3)



第24図 第59号土坑出土遺物実測図(4)

第59号土坑出土遺物観察表(第20~24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
33	土師質土器	内耳鍋	[33.8]	18.2	[17.9]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	体部内面ヘラナデ 耳部貼り付け後ナデ調整 外面ナデ 下端~底部ヘラ削り	覆土中層	60% PL 7
34	土師質土器	内耳鍋	32.7	16.7	[19.6]	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	体部内面ヘラナデ 耳部貼り付け後ナデ調整 外面ナデ 下端~底部ヘラナデ	覆土中層	70% PL 7
35	土師質土器	内耳鍋	37.7	19.1	17.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	明褐	普通	体部内面ヘラナデ 耳部貼り付け後ナデ調整 外面ナデ 底部ヘラナデ	覆土中層	90% PL 7
36	土師質土器	内耳鍋	[33.0]	18.0	[23.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内・外面ナデ 下端~底部ヘラナデ	覆土中層	20%
37	土師質土器	内耳鍋	-	(5.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	耳部貼り付け後ナデ調整	覆土中	5%
38	土師質土器	内耳鍋	-	(6.5)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	耳部貼り付け後ナデ調整	覆土中	5%
39	土師質土器	内耳鍋	-	(11.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラナデ 内面∟字状のヘラ記号	覆土中層	5%

### 3 その他の遺構と遺物

時期や性格の明確でない遺構は堅穴住居跡2軒、溝跡1条、土坑96基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 堅穴住居跡

##### 第1号住居跡(第25図)

**位置** 調査区中央部のA 4 b9区、標高35mの台地縁辺部に位置している。

**規模と形状** 長軸2.26m，短軸2.24mの方形で，長軸方向はN-5°-Wである。壁高は8～18cmで，直立している。

**床** 平坦で，締まりが弱い。北壁際にスロープ状の高まりが確認されており，出入口に関わる施設と考えられる。

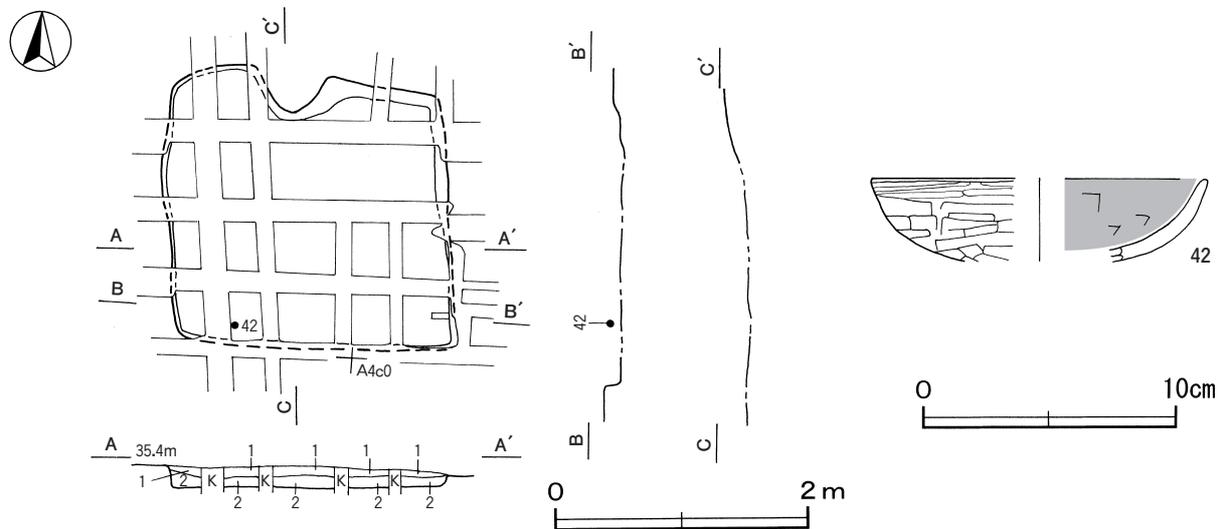
**覆土** 2層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示した人為堆積である。

**土層解説**

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物・焼土粒子少量      2 褐色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師器片9点（坏2，甕2，不明5），須恵器片3点（坏，甕，不明）が出土している。42は覆土中層から出土している。

**所見** 時期は，出土土器が本跡に伴うものとは判断できず，不明である。また，隣接する第2・5・6号住居跡とも主軸方向が異なることや，床の締まりが弱く，内部施設を確認できないことなどから住居跡かどうか明確でなく，住居以外の施設の可能性も考えられる。



第25図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
42	土師器	坏	[13.2]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	口縁部外面ヘラ磨き 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	覆土中層	10%

**第4号住居跡（第26図）**

**位置** 調査区西部のA3f2区，標高35mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第48号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 南部が調査区域外に伸びており，長軸2.75m，短軸は1.86mだけが確認された。平面形は方形もしくは長方形と推測され，長軸方向はN-85°-Eである。壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で，締まりがない。

**ピット** 7か所。P1～P7は，深さ8～14cmで，性格は不明である。

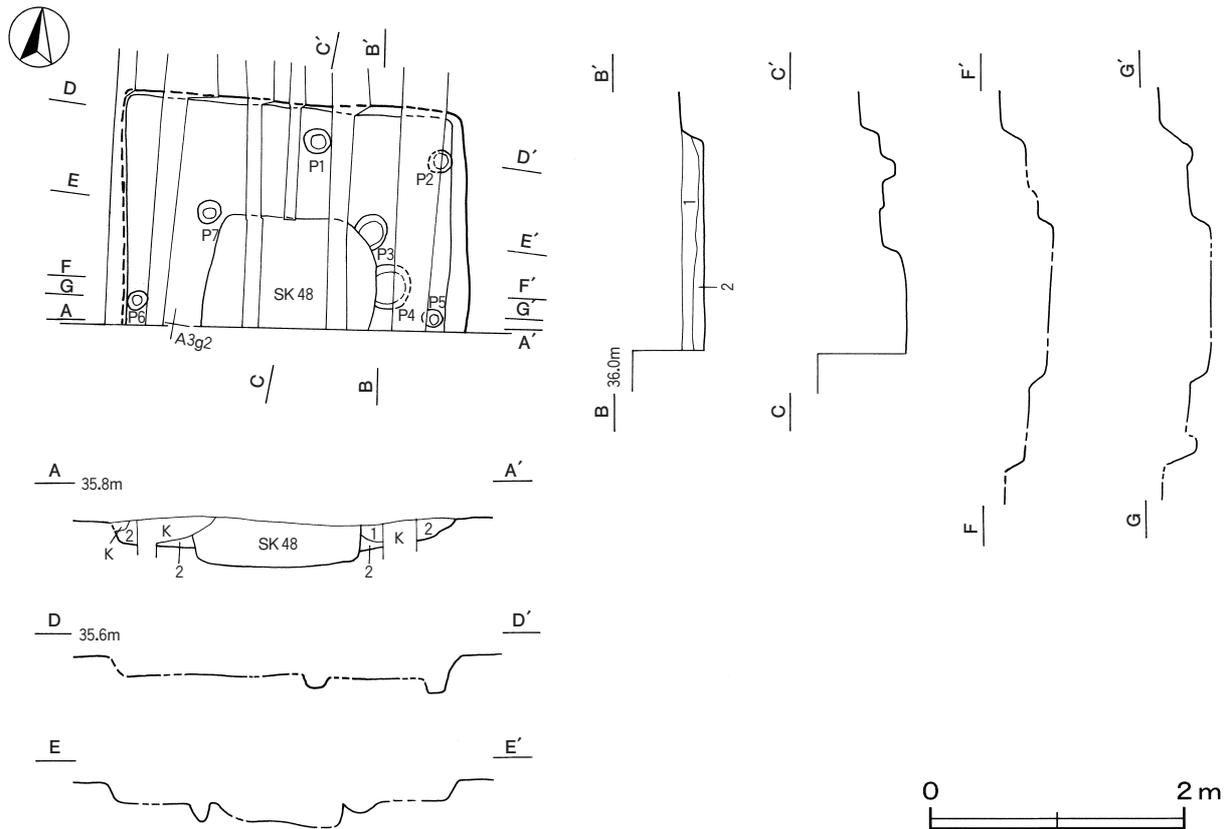
**覆土** 2層に分層される。攪乱が著しく、堆積状況は不明である。

**土層解説**

1 黒褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

**所見** 時期は、出土土器が無いため不明である。また、調査区内の他の住居跡とは主軸方向が異なることや、床の締まりが弱く、内部施設を確認できないことなどから住居跡かどうか明確でなく、住居以外の施設の可能性も考えられる。



第26図 第4号住居跡実測図

表5 その他の竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 (古→新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	竈	貯蔵穴				
1	A 4 b9	N-5°-W	方形	2.26 × 2.24	8~18	平坦	-	-	1	-	-	-	人為	土師器	不明	
4	A 3 f2	N-85°-E	[方形・ 長方形]	2.75 × (1.86)	15~20	平坦	-	-	-	7	-	-	不明		不明	本跡→SK48

(2) 溝跡

**第1号溝跡** (第27図, 付図)

**位置** 調査区東部のA 8 c2~A 8 f2区, 標高35mの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** A 8 c2区から南方(N-6°-W)へ直線的に延びている。南北両端が調査区域外に延びており、

確認された長さは12.9mで、上幅0.31~1.52m、下幅0.14~1.14m、深さ18~36cmで、断面形は半円形を呈している。

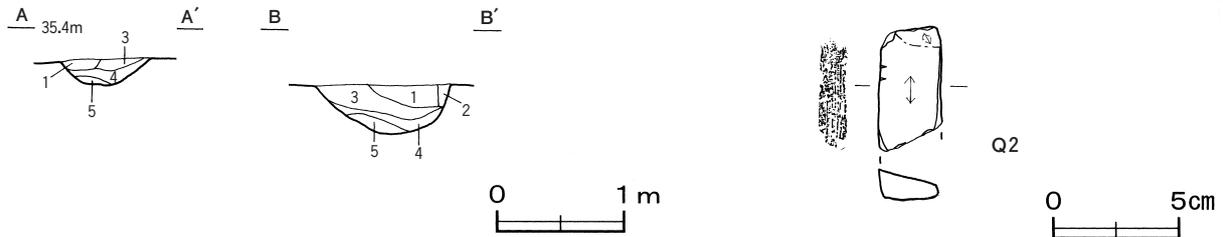
**覆土** 5層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示した、人為堆積である。

**土層解説**

- |       |              |       |           |
|-------|--------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色  | ロームブロック中量    | 5 褐色  | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量      |       |           |

**遺物出土状況** 土師器片2点（甕）、須恵器片1点（坏）、陶器片1点（碗類）、土師質土器片1点（鍋類）、石器1点（砥石）が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から明確に判断できないため不明であるが、地境の区画溝と推定される。



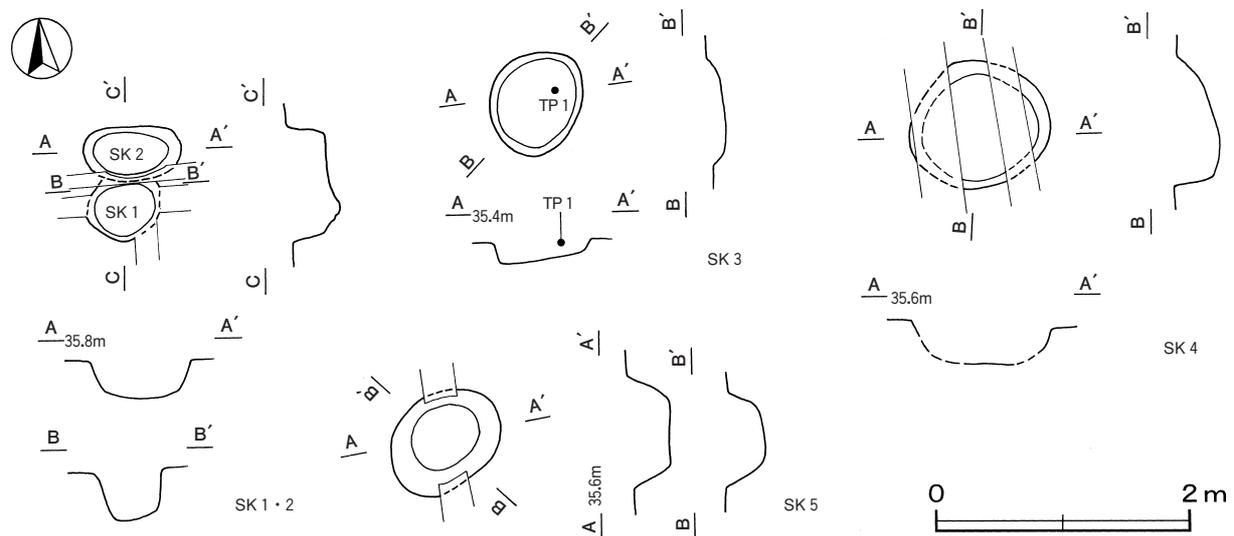
第27図 第1号溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第27図）

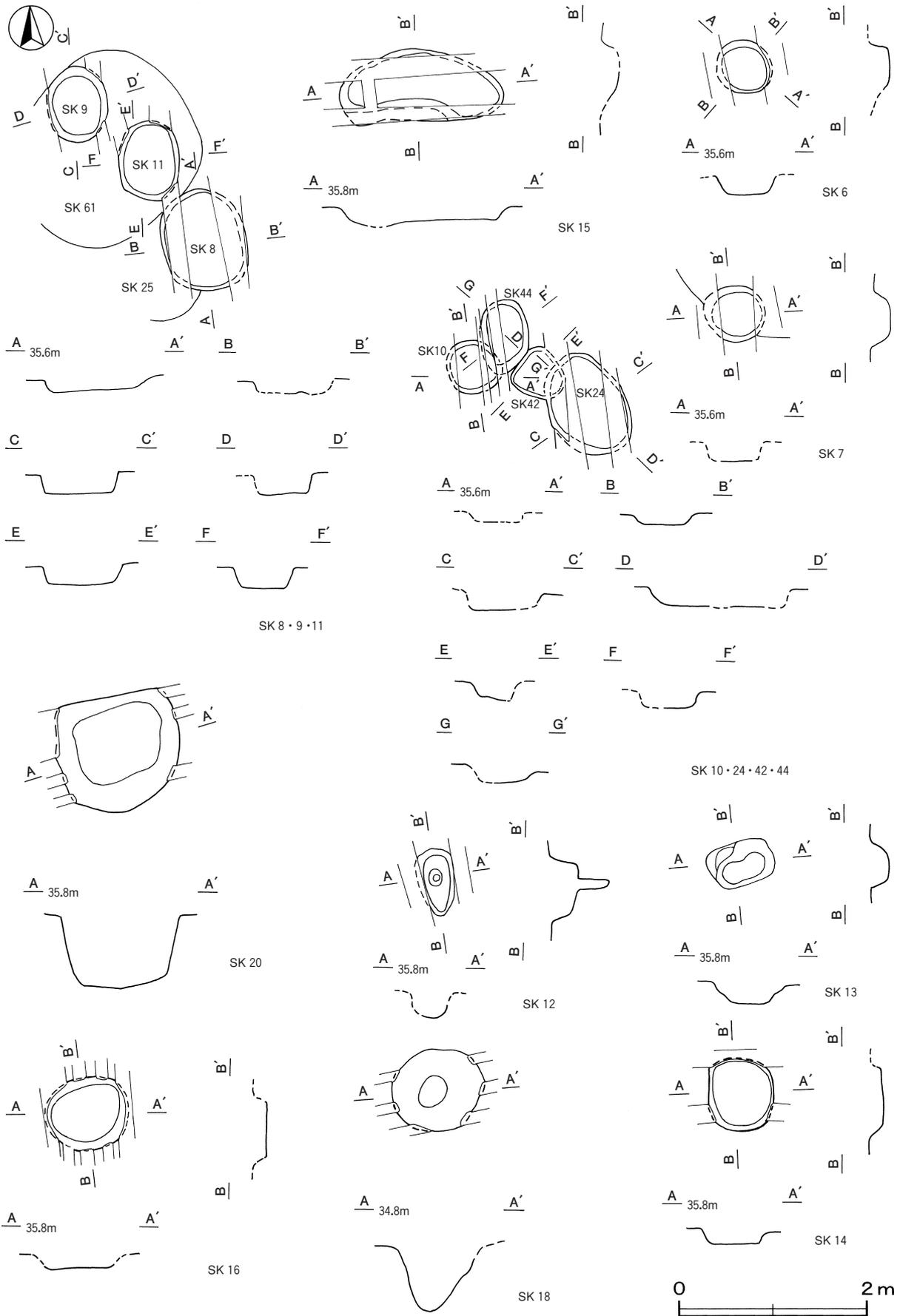
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	(5.0)	2.5	1.3	(18.9)	変質テイスイト	砥面1面 左側面に櫛歯状の切削痕 下半欠損	覆土中	PL8

(3) 土坑（第28~35図、表6）

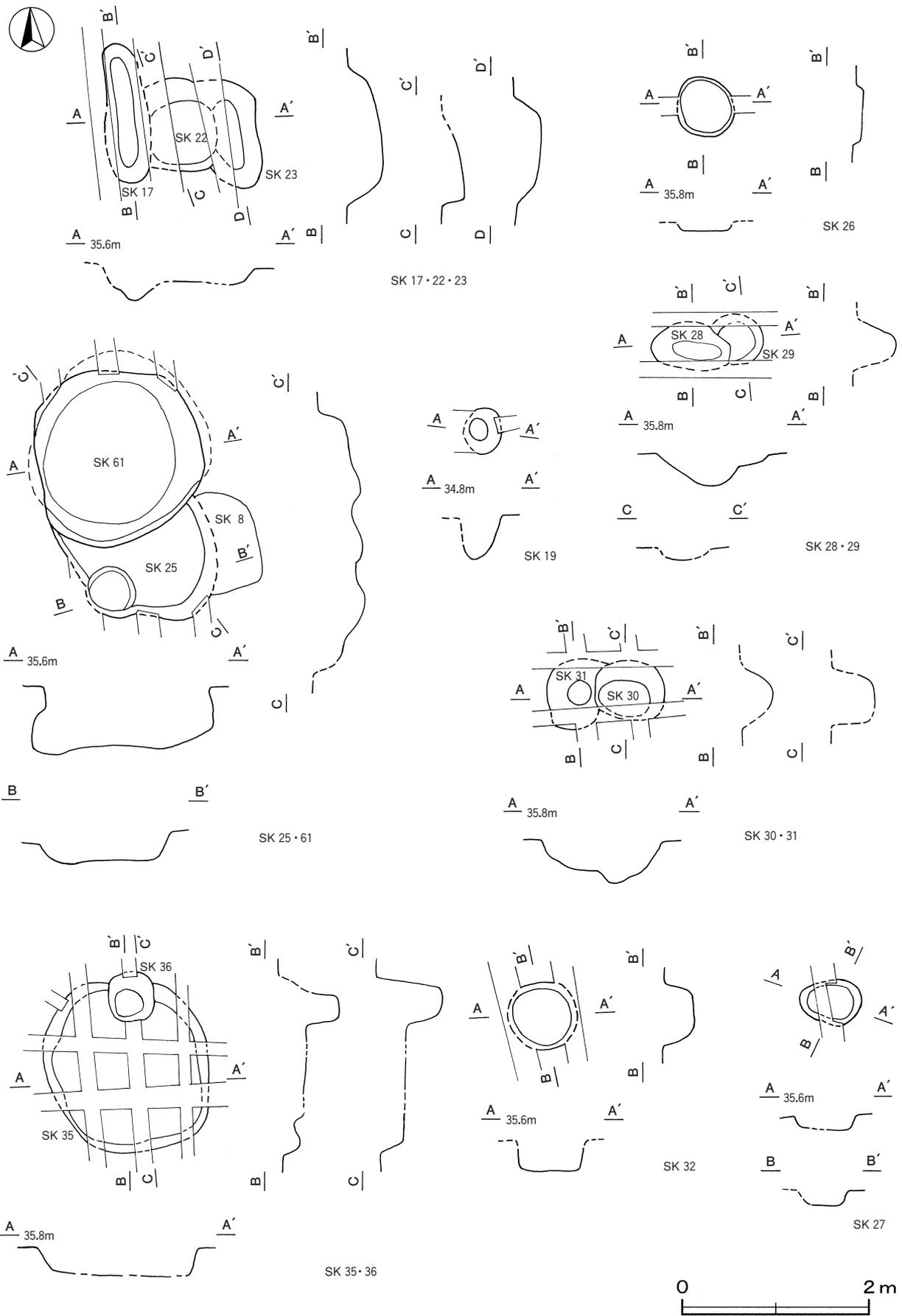
時期及び性格の不明な土坑については、以下、実測図・一覧表を記載する。



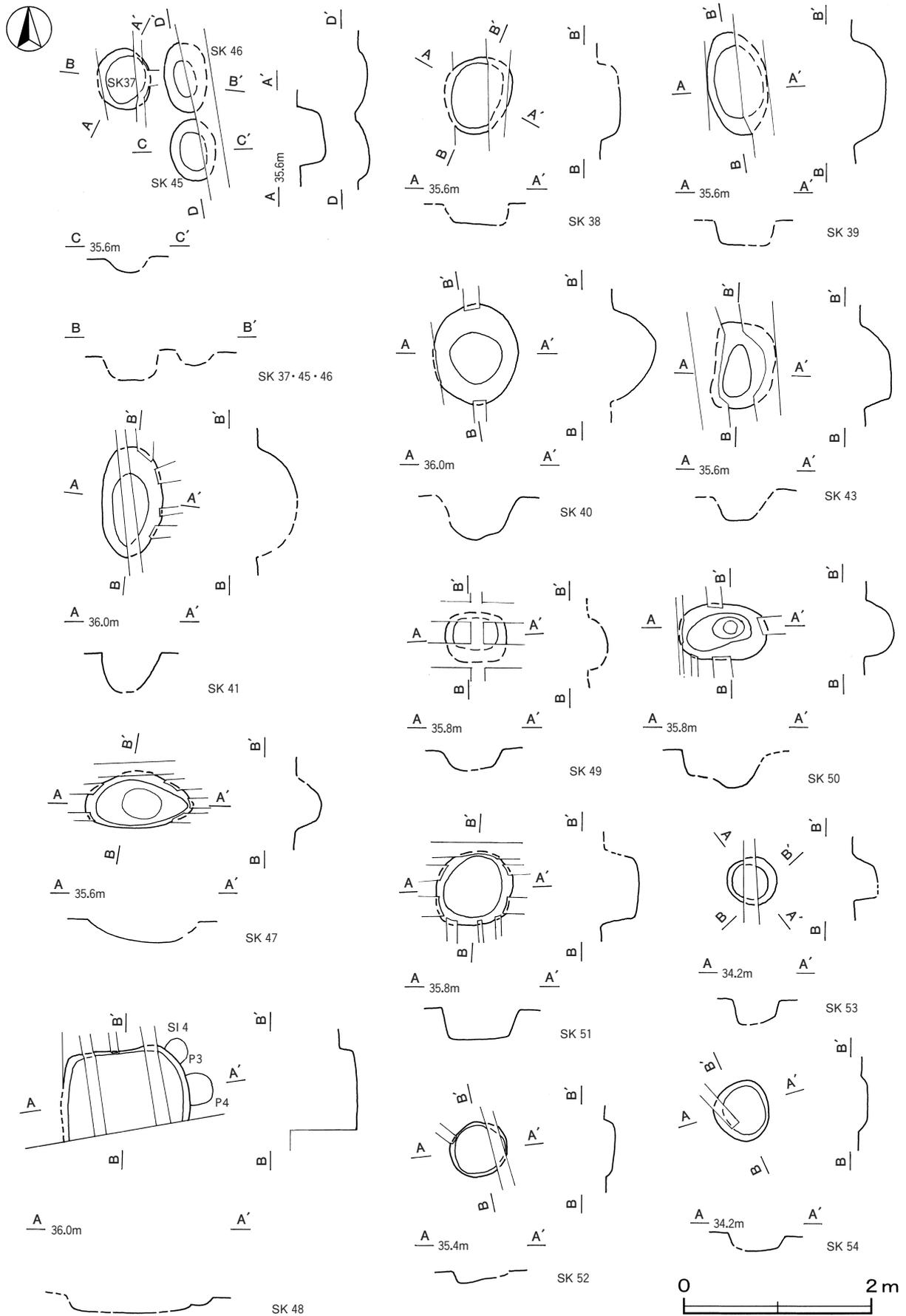
第28図 その他の土坑実測図（1）



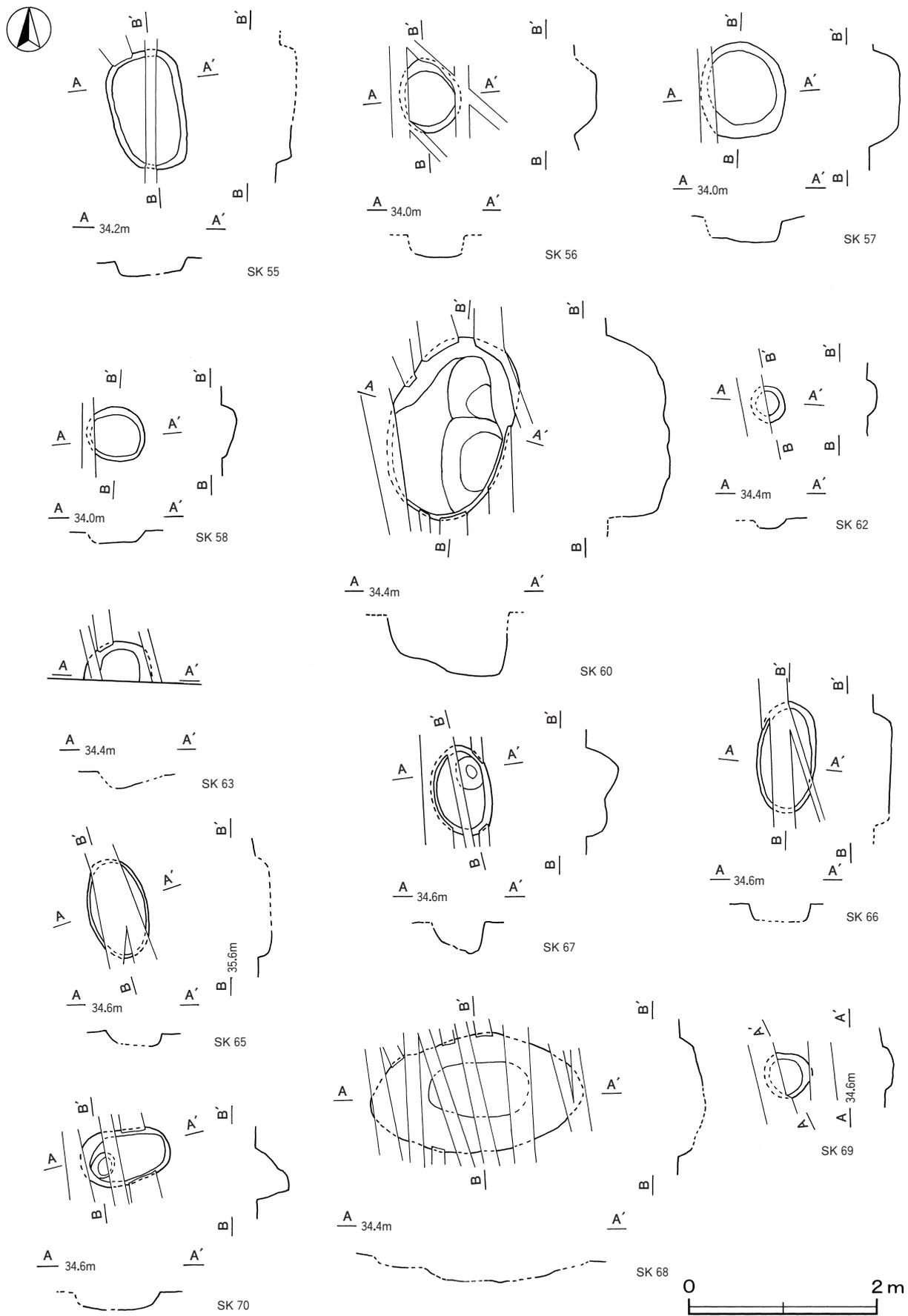
第29図 その他の土坑実測図 (2)



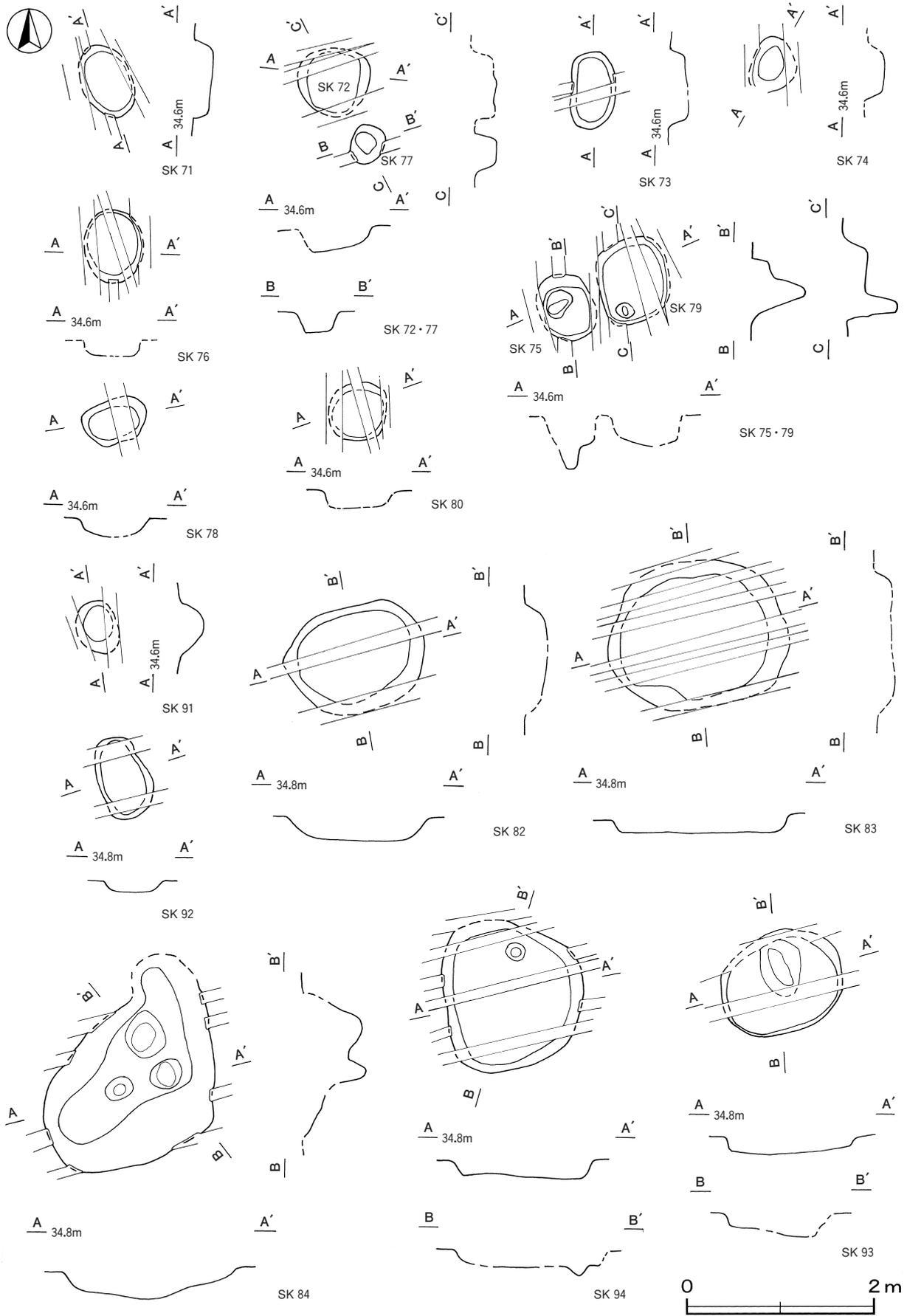
第30図 その他の土坑実測図 (3)



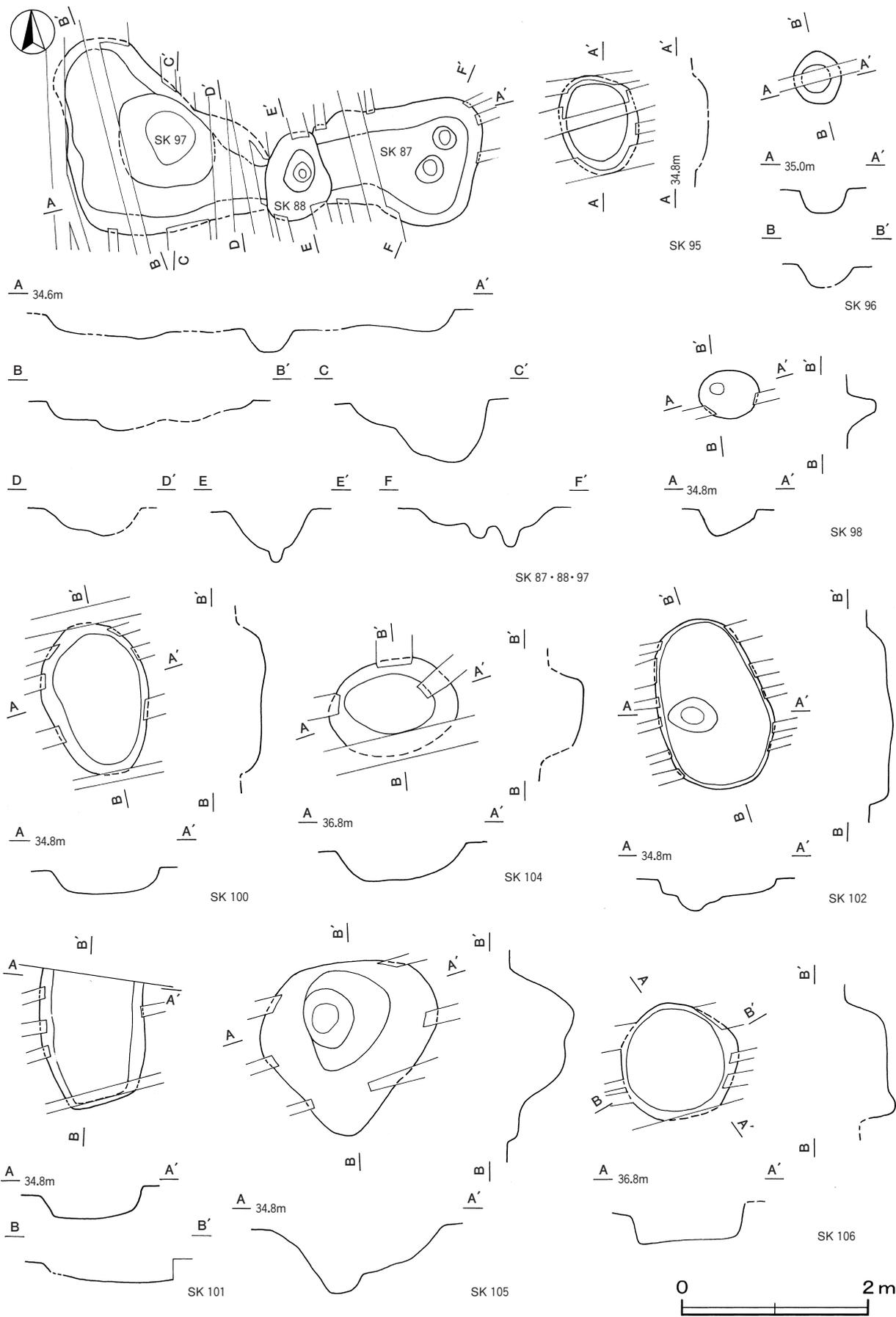
第31図 その他の土坑実測図 (4)



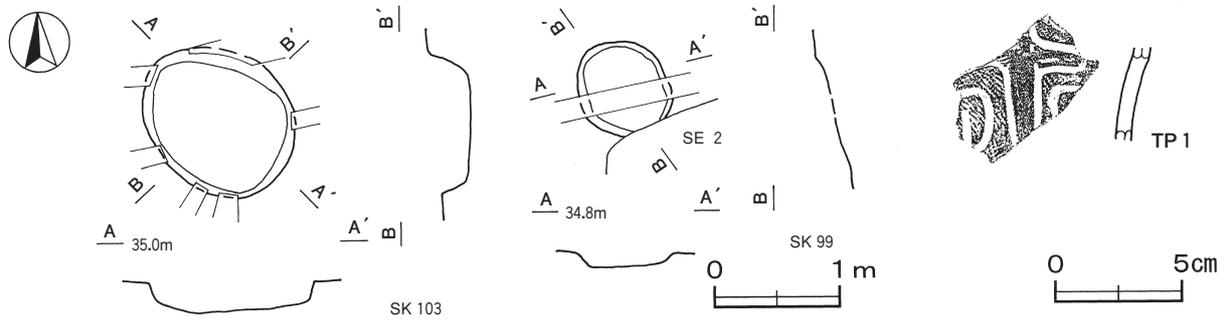
第32図 その他の土坑実測図 (5)



第33図 その他の土坑実測図 (6)



第34図 その他の土坑実測図 (7)



第35図 その他の土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第35図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	地文R Lの単節縄文 沈線による懸垂文間を磨り消し	覆土中層	5% PL 6

表6 その他の土坑一覧表

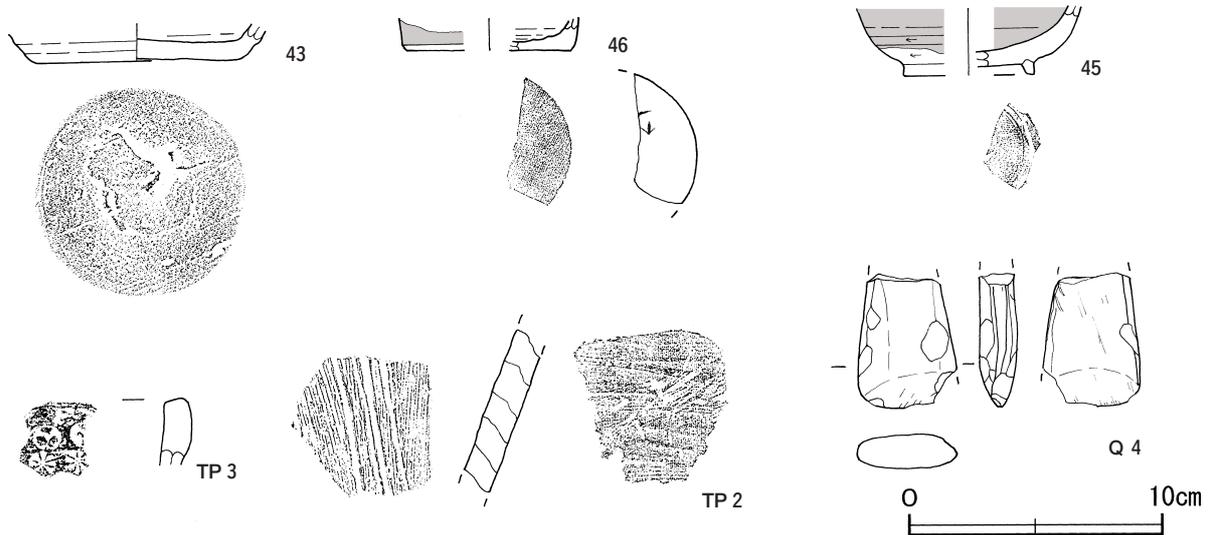
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
1	A 3 c5	N-86°-E	楕円形	[0.57] × (0.46)	41	直立	凹凸	人為		SK 2と重複
2	A 3 c5	N-86°-E	楕円形	0.79 × [0.44]	32	直立	皿状	人為		SK 1と重複
3	A 1 c8	—	円形	0.80 × 0.75	17	外傾	平坦	不明	縄文土器	
4	A 2 c0	—	円形	1.08 × 1.02	28	外傾	皿状	人為		
5	A 3 f1	N-47°-E	楕円形	0.91 × 0.72	24	外傾	皿状	人為		
6	A 3 f1	—	円形	0.60 × [0.58]	23	外傾	平坦	人為		
7	A 3 d1	—	円形	[0.65] × 0.58	22	外傾	平坦	人為		SK25→本跡
8	A 3 d1	N-9°-W	楕円形	1.06 × [0.87]	12	外傾	平坦	人為		SK25→本跡
9	A 3 d1	N-10°-W	楕円形	0.82 × [0.64]	21	外傾	平坦	人為		SK61→本跡
10	A 3 c1	—	円形	0.56 × [0.56]	11	外傾	平坦	人為		SK44と重複
11	A 3 d1	N-1°-E	楕円形	0.84 × 0.66	30	外傾	平坦	不明		SK61→本跡
12	A 3 d4	N-10°-W	楕円形	0.74 × [0.42]	69	外傾	凹凸	人為		
13	A 4 d2	N-71°-E	楕円形	0.70 × 0.47	24	外傾	平坦	人為		
14	A 4 c4	N-10°-E	楕円形	[0.75] × 0.68	15	外傾	平坦	人為		
15	A 3 d9	N-89°-E	楕円形	1.74 × 0.64	18	外傾	平坦	人為		
16	A 4 c1	—	円形	[0.86] × 0.78	18	外傾	平坦	人為		
17	A 3 e1	N-10°-W	楕円形	1.53 × [0.50]	40	緩斜	皿状	人為		SK22と重複
18	A 7 e6	N-77°-E	楕円形	0.98 × 0.86	75	外傾	皿状	人為		
19	A 7 e6	N-7°-W	楕円形	0.50 × [0.41]	48	外傾	皿状	不明		
20	A 7 e7	—	円形	1.34 × 1.27	94	外傾	凹凸	人為		
22	A 3 e1	—	円形	1.04 × (0.80)	25	緩斜	傾斜	不明		SK17・23と重複
23	A 3 e1	N-7°-W	楕円形	1.20 × (0.60)	25	外傾	平坦	不明		SK22と重複
24	A 3 c1	N-36°-W	楕円形	[1.16] × [0.83]	20	外傾	平坦	人為		SK42と重複
25	A 3 d1	N-37°-W	(楕円形)	1.52 × (1.01)	50	外傾	凹凸	人為		本跡→SK61
26	A 4 b5	—	円形	0.66 × 0.61	10	外傾	平坦	人為		
27	A 3 f1	N-83°-W	楕円形	0.65 × [0.47]	15	外傾	平坦	自然		
28	A 3 c0	N-82°-W	楕円形	0.86 × [0.52]	45	外傾	皿状	人為		本跡→SK29
29	A 3 c0	—	[円形]	[0.58] × [0.55]	12	外傾	皿状	不明		SK28→本跡

番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
30	A 3 b0	N-80°-W	[楕円形]	0.84 × [0.64]	52	外傾	平坦	人為		SK31→本跡
31	A 3 b0	N-8°-W	[楕円形]	[0.74] × (0.50)	40	外傾	皿状	人為		本跡→SK30
32	A 3 f1	-	円形	0.74 × [0.72]	36	外傾	平坦	人為		
35	A 3 e8	N-15°-W	楕円形	1.87 × 1.72	28	外傾	平坦	人為		SK36→本跡
36	A 3 e8	-	円形	0.52 × 0.48	68	外傾	平坦	人為		本跡→SK35
37	A 3 d1	N-19°-W	楕円形	0.66 × [0.56]	26	外傾	平坦	人為		
38	A 3 d1	N-7°-E	楕円形	0.84 × [0.71]	20	外傾	平坦	人為		
39	A 3 d1	N-9°-W	楕円形	1.12 × [0.65]	28	外傾	皿状	人為		
40	A 3 c5	-	円形	1.03 × [0.94]	45	外傾	皿状	人為		
41	A 3 e8	N-3°-E	楕円形	1.19 × 0.64	45	緩斜	皿状	人為		
42	A 3 c1	N-44°-W	楕円形	0.62 × 0.48	20	外傾	凹凸	不明		SK24と重複
43	A 2 c0	N-2°-E	[楕円形]	0.92 × [0.66]	35	外傾	平坦	人為		
44	A 3 c1	N-9°-W	楕円形	0.76 × 0.50	18	外傾	平坦	人為		SK10と重複
45	A 3 d1	N-7°-W	楕円形	0.65 × [0.48]	9	緩斜	皿状	人為		
46	A 3 d1	N-11°-W	楕円形	0.75 × [0.45]	7	緩斜	皿状	人為		
47	A 4 b0	N-89°-E	楕円形	1.16 × [0.61]	24	緩斜	皿状	人為		
48	A 3 f2	N-82°-E	[長方形]	1.39 × (0.87)	36	外傾	平坦	人為		SI 4 →本跡
49	A 3 c7	N-90°	長方形	0.63 × [0.54]	20	外傾	平坦	人為		
50	A 3 c7	N-89°-E	楕円形	0.94 × 0.58	38	外傾	凹凸	人為		
51	A 3 c6	-	円形	[0.79] × 0.80	34	外傾	平坦	人為		
52	A 6 d6	-	円形	0.63 × 0.59	15	外傾	平坦	不明		
53	A 6 e5	-	円形	0.55 × [0.52]	30	外傾	平坦	人為		
54	A 6 c6	N-19°-W	楕円形	0.66 × 0.58	18	緩斜	平坦	人為		
55	A 6 e4	N-21°-W	隅丸方形	1.31 × 0.77	22	外傾	平坦	人為		
56	A 6 c4	N-31°-W	楕円形	0.75 × [0.64]	26	緩斜	平坦	人為		
57	A 6 e5	N-16°-W	楕円形	1.04 × [0.92]	34	外傾	平坦	不明		
58	A 6 e5	-	円形	[0.64] × 0.58	15	緩斜	皿状	不明		
60	A 6 c8	N-11°-E	楕円形	1.97 × [1.38]	65	外傾	皿状	人為		
61	A 3 d1	-	円形	(1.86) × 1.82	74	内傾	凹凸	人為		SK25→本跡→SK 9・11
62	A 6 d7	N-9°-W	楕円形	0.41 × (0.14)	10	外傾	平坦	不明		
63	A 7 e1	-	[円形]	0.68 × (0.41)	15	緩斜	皿状	人為		
65	A 7 c1	N-15°-W	楕円形	1.09 × 0.54	10	外傾	平坦	不明		
66	A 6 c0	N-0°	楕円形	1.21 × 0.62	15	平坦	外傾	不明		
67	A 7 d2	N-10°-W	楕円形	0.99 × [0.66]	35	外傾	凹凸	人為		
68	A 6 d8	N-85°-E	楕円形	[2.28] × 1.27	32	緩斜	皿状	人為		
69	A 7 c1	-	円形	0.50 × (0.32)	15	外傾	皿状	不明		
70	A 7 d2	N-83°-E	楕円形	[0.96] × 0.54	35	外傾	皿状	人為		
71	A 7 d4	N-20°-W	楕円形	0.76 × [0.54]	20	外傾	平坦	不明		
72	A 7 c4	-	円形	0.79 × [0.78]	28	外傾	平坦	人為		
73	A 7 c5	N-6°-E	楕円形	0.84 × 0.45	20	外傾	平坦	不明		
74	A 7 e3	N-16°-E	楕円形	0.62 × [0.46]	21	外傾	平坦	人為		
75	A 7 e3	N-28°-W	楕円形	0.73 × [0.56]	59	外傾	凹凸	人為		
76	A 7 d3	N-8°-W	楕円形	[0.79] × [0.62]	19	外傾	平坦	不明		
77	A 7 d4	N-29°-E	楕円形	0.42 × [0.35]	24	外傾	平坦	人為		
78	A 7 c5	N-76°-E	楕円形	0.69 × 0.48	19	外傾	皿状	人為		
79	A 7 d3	N-16°-W	長方形	0.90 × [0.77]	56	外傾	凹凸	人為		

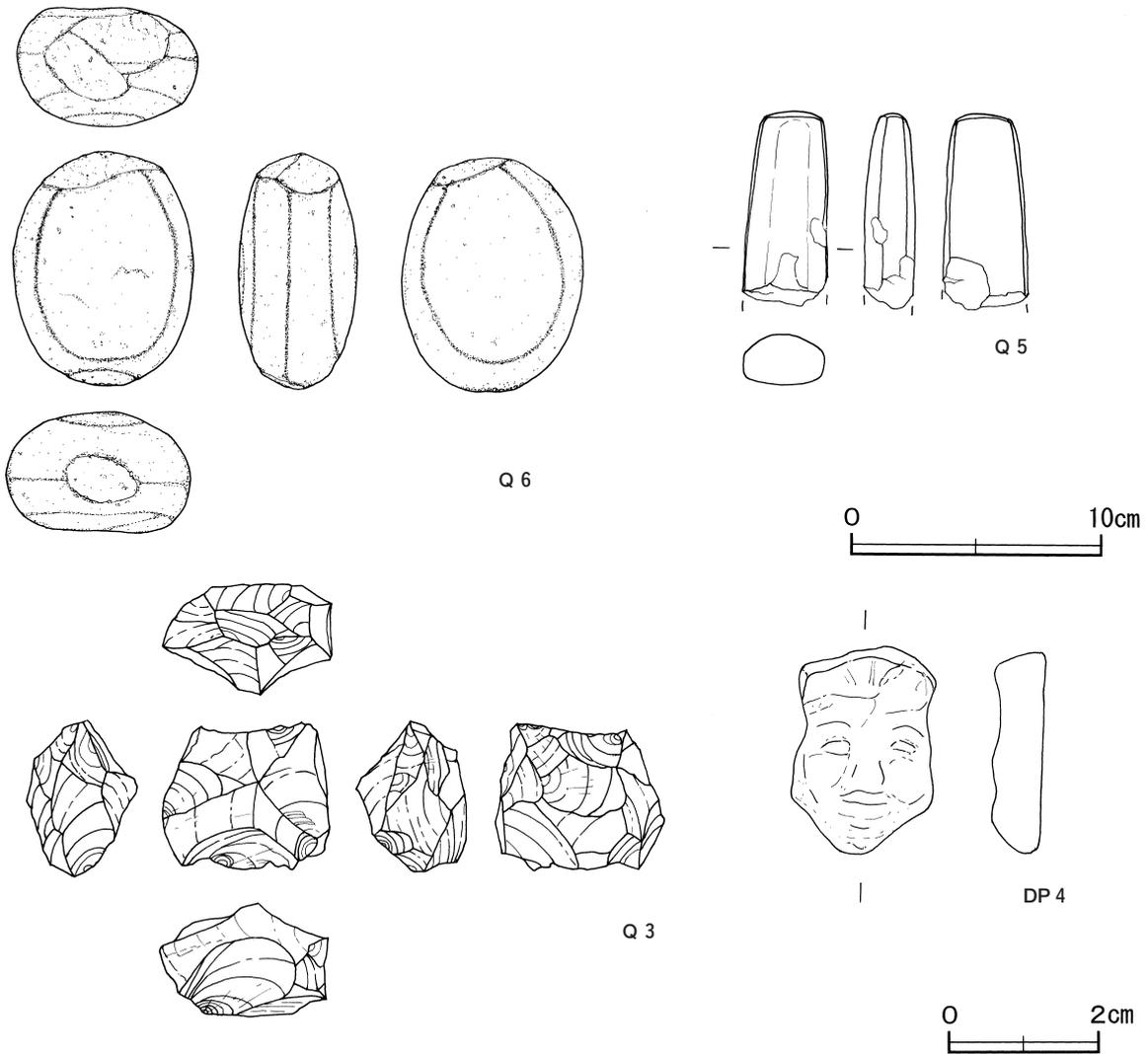
番号	位置	長軸(径)方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長軸(径)×短軸(径)(m)	深さ(cm)					
80	A 7 d3	—	[円形]	[0.67] × 0.64	17	外傾	平坦	不明		
82	A 7 c6	N-76°-E	楕円形	1.50 × (1.14)	25	外傾	平坦	不明		
83	A 7 e5	N-76°-E	楕円形	1.89 × [1.57]	21	外傾	平坦	人為		
84	A 7 e5	N-51°-E	不整楕円形	2.14 × 1.54	73	外傾	皿状	人為		
87	A 7 d4	N-81°-E	不整長方形	(1.68) × 1.34	44	外傾	凹凸	人為		本跡→SK88
88	A 7 d4	N-12°-E	楕円形	0.97 × 0.71	59	外傾	皿状	人為		SK87・97→本跡
91	A 7 e3	N-21°-W	楕円形	0.60 × [0.44]	27	外傾	皿状	人為		
92	A 7 d8	N-13°-W	楕円形	0.89 × 0.55	13	外傾	平坦	人為		
93	A 7 d8	N-71°-E	楕円形	1.33 × 1.10	19	外傾	平坦	人為		
94	A 7 e8	N-8°-W	楕円形	[1.62] × 1.48	21	外傾	平坦	人為		
95	A 7 e9	N-12°-W	楕円形	[1.08] × 0.82	15	緩斜	平坦	人為		
96	A 7 d0	N-6°-W	楕円形	0.57 × 0.50	25	外傾	皿状	人為		
97	A 7 d3	N-21°-W	不定形	2.24 × [1.98]	71	緩斜	凹凸	人為		本跡→SK88
98	A 7 c9	N-74°-E	楕円形	0.64 × 0.52	31	外傾	皿状	人為		
99	A 7 c6	N-27°-W	[楕円形]	(0.75) × 0.73	12	緩斜	平坦	不明		本跡→SE 2
100	A 7 d7	N-15°-W	楕円形	[1.63] × 1.13	32	緩斜	平坦	人為		
101	A 7 c9	N-4°-W	[長方形]	(1.50) × 1.11	21	外傾	平坦	人為		
102	A 7 e9	N-18°-W	楕円形	1.87 × 1.22	22	直立	平坦	人為		
103	A 7 e0	N-39°-W	楕円形	1.31 × 1.08	23	直立	平坦	不明		
104	A 8 c1	N-74°-E	楕円形	1.89 × [1.02]	35	緩斜	平坦	人為		
105	A 7 d9	N-79°-E	不整円形	1.95 × 1.95	65	緩斜	凹凸	人為		
106	A 8 e1	—	円形	1.29 × 1.28	35	外傾	平坦	人為		

(4) 遺構外出土遺物 (第36・37図)

今回の調査で出土した移行に伴わない遺物のうち、特徴的なものについて実測図と観察表で記載する。



第36図 遺構外出土遺物実測図(1)



第37図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第36・37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	須恵器	坏	-	(1.4)	8.3	長石・石英・黒色粒子	灰	良	体部内・外面ロクロナデ 底部回転糸切り後回転ヘラ削り	表採	30%
45	陶器	小碗	-	(2.7)	[5.0]	緻密・灰釉	胎：浅黄釉：灰白	良	体部内・外面ロクロナデ 下端～底部回転ヘラ削り 高台貼り付け	表採	10% 瀬戸・美濃系
46	陶器	壺類	-	(1.3)	[6.4]	緻密・長石釉	胎：浅黄釉：灰白	良	体部内・外面ロクロナデ 底部回転ヘラ削り 見込みに強いロクロ目	表採	5% 墨書「□」瀬戸・美濃系
TP2	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	地文縦位の条線文 3条1組の沈線文を垂下	SE1 覆土中	5%
TP3	土師質土器	香炉	-	(2.7)	-	雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面スタンプ文 巴・菊花	表土中	5% PL6

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP4	泥面子	2.7	2.0	0.7	(3.2)	赤色粒子	人面 大黒天カ	表土中	95% PL8
Q3	石核	2.0	2.2	1.5	6.3	瑪瑙	多方向からの押剥離	表採	PL8
Q4	磨製石斧	(5.3)	4.0	1.5	(45.9)	凝灰岩	両刃 全面研磨調整	表採	PL8
Q5	磨製石斧	(8.0)	3.4	2.1	(96.2)	緑色凝灰岩	刃部欠損 全面研磨調整	表採	PL8
Q6	磨石	9.5	7.2	4.8	454.0	花崗岩	磨り跡3か所	表土中	PL8

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

今回の調査では、縄文時代の遺物や、奈良時代・中世の遺構と遺物がそれぞれ確認されている。以下では、各時代の様相について概観する。

### 2 各時代の様相

#### (1) 縄文時代

縄文土器片2点、石器3点（磨製石斧2、磨石1）が出土している。『鉾田町史 原始・古代史料編』によれば、当遺跡からは鶴ヶ島台式土器と加曾利E式土器片が採集されているが、調査区内で確認できた土器は中期の土器と後期称名寺式の深鉢胴部片であった。当遺跡が、長茂川の支流を臨む台地の縁辺部から平坦部に立地することを考慮すれば、調査区域外にこの時期の集落の存在も想定される。

#### (2) 奈良時代

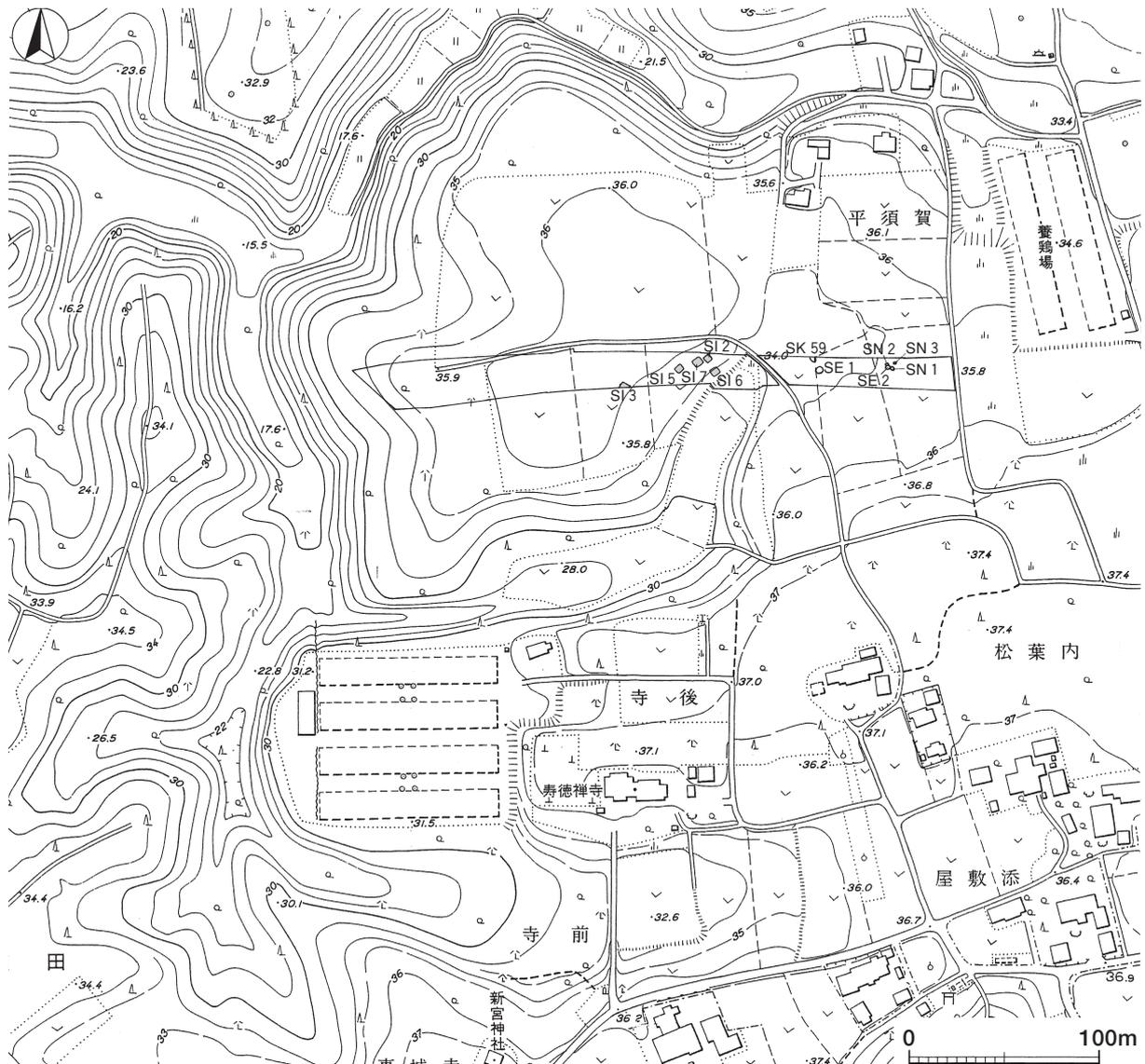
調査区の中央部で奈良時代の竪穴住居跡5軒を調査した。このうち形状を明確にとらえられなかった第7号住居跡を除けば、いずれも主軸方向が一致しており、規模にも差異はそれほど認められなかった。時期については、第2・3・6号住居跡が8世紀第1四半期で、第5号住居跡だけが8世紀第3四半期と判断された。遺物が出土しなかった第7号住居跡についても、周辺の表土中から8世紀代の土器は出土しておらず、他の4軒と大きな時期差はないものと推測される。

各住居跡から出土した遺物は、第3・6号住居跡の覆土が厚く残存し、遺物の出土量が多い。土器は土師器が大部分であるが、第6号住居跡では、在地産の須恵器蓋（第11図P24）や搬入品とみられる須恵器壺（第12図P27）が出土している。遺構の時期は、8世紀第1四半期の中でも古い段階にあたりと考えられる。また、第3号住居跡から出土した須恵器坏（第7図P8）は、8世紀第2四半期と想定され、攪乱により混入したものとみられ、周辺に同時期の遺構も存在していたことをうかがわせる。

これらの住居群を含んだ集落の様相については、8世紀代の住居跡は調査区中央部に限定されており、東部が樹枝状に入り込んだ谷津頭によって中央部と区切られていることから、この支谷に沿って集落が展開していたと考えられる。調査区域外の北部と南部には台地平坦部が広がっており、これらの範囲に集落が展開していたと想定されるが、同じく台地平坦部の調査区西部には遺構が確認できなかったことを考慮すれば、集落は台地縁辺部に限られた小規模なものであった可能性が高い。集落の消長については、8世紀第1四半期が住居跡4軒、第2四半期は遺物だけの確認、第3四半期は住居1軒であり、8世紀初頭を初現として第2四半期以降は規模が縮小するか、中心を調査区域外に移しながら継続したと想定され、集落は第4四半期から9世紀初頭までに完全に消滅したと考えられる。

#### (3) 中世

調査区の東部で井戸跡2基、粘土貼り土坑3基、土坑1基が確認されている。このうち、第1号粘土貼り土坑から出土した天目茶碗は、藤澤編年<sup>1)</sup>による瀬戸・美濃の大窯2～3期に相当するとみられ、遺構の時期を16世紀中頃に比定できる。他の遺構については、陶磁器類が出土しておらず厳密な時期を判断できないが、出土した内耳鍋の特徴に明確な差異がないことや、時期については、第2号井戸と第



第38図 東ノ越遺跡周辺地形図（鉾田町都市計画図）

2号粘土貼り土坑が配置から第1号粘土貼り土坑と一連の遺構と推測されることなどから、第1号粘土貼り土坑と連続する16世紀前から中葉を想定した。

遺構の性格については、2基の井戸跡の存在に着目すれば、炊事施設の存在が想定できる。集落の存在は、第59号土坑を中心に、周辺で多くの土師質土器の内耳鍋が出土していることや、井戸の周辺で水利施設とみられる粘土貼り土坑が確認された点は集落の存在を想定できるが、施設の主体となるような掘立柱建物跡など建物跡の痕跡は確認されていない。資料に乏しいため推測の域を脱しないが、遺構・遺物ともに水との密接な関係が想定され、広義の排水施設が存在していたことは間違いのないであろう。

また、同時期の周辺の遺跡に注目すれば、長茂川と田中川に挟まれた台地上は、北浦を臨む台地の南西端に位置した畑田城跡をはじめとして、台地上に畑田八館と呼ばれる畑田氏臣下の居館跡が点在している。このうち、馬場館跡が当遺跡の南方500m、勧請地館跡が東方550mに位置しているほか、南に隣接する寿徳禅寺は畑田氏の氏寺の一つとされ、永享7（1435）年の「常陸国富有人等注文」の記載や、

『烟田旧記』に記された天正13（1585）年の大風による本堂の被災の記事など、文献上から15～16世紀代に同寺が存在していたことが確認できる<sup>2)</sup>。今回の調査では、中世居館や寺院との関わりを示す遺構・遺物は確認できなかったが、中世の遺構が確認された調査区東部は寿徳禅寺と地形的に連続しており、さらに時期的にも一致することから、密接な関わりがうかがわれる。

遺物については、第59号土坑から7点の土師質の内耳鍋が出土している。このうち、33～36は口縁部から底部までが確認できており、口径に対して器高が1/2前後と高さがあり、体部が内彎して口縁部内面に稜を持つなど共通した特徴を備えている。また、いずれの個体も外面に煤が付着し、黒変していることから、一定期間以上使用した後に廃棄されたものといえる。33・34・36は特に法量・胎土とも類似しており、口径は32.7～33.8cm、器高が16.7～18.2cmで、全般に胎土の粒子が粗く、雲母粒子を多量に混入している。35のみが口径37.7cmと一回り大きく、胎土の粒子は細かく、雲母粒子もわずかに混じるのみであるなどやや異質な印象を受ける。この法量や胎土の違いについては、個体ごとの時期差か、産地の違いや用途の別を示していると推測されるが、出土状況からは明瞭な時期差を見出せない。また、産地については、胎土に雲母粒子が混入することから、おおむね筑波山麓南西部の地域を想定できるが、同地域産の内耳鍋に関する資料が未だ不十分であり、同定するには至らなかった。

### 3 結びにかえて

今回の調査は、当遺跡にとって初めての本格的な発掘調査であり、表採で存在が想定されていた縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世のうち、縄文時代の遺物と奈良時代・中世の遺構・遺物が確認された。

縄文時代については、遺跡の立地から集落の存在も想定できるが、今回の調査では遺構を確認できておらず、今後の調査の展開に期待したい。奈良時代の集落跡については、市内では平出久保遺跡に続いて2例目の調査となるが、確認できた遺構数は両遺跡をあわせても竪穴住居跡7軒と極めて少なく、巴川・長茂川の両水系に沿った台地縁辺部に集落が展開していた様相を知ることができる。中世については、一連の遺構の性格を明らかにすることはできなかったが、長茂川と田中川に挟まれた舌状台地には、中世烟田氏と結びつけられる遺跡が点在しており、当遺跡もそれらとの結びつきの中でとらえられていくべきものと考えられる。また、土師質の内耳鍋が良好な状態で出土しているが、今回の調査では年代や産地について同定するには至らなかった。本書で提示した資料が、今後の研究の一助になることに期待をしたい。

#### 註

- 1) 藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 2002年
- 2) 平野明夫「第5章 信仰と寺社」『鉦田町史 通史編』上巻 2000年2月

#### 参考文献

- 佐々木義則「木葉下窯跡群産坏A Iの変化について—消費地における形態と調整技法の様相」『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古学同人会 1995年5月
- 赤井博之・佐々木義則「新治窯跡群産須恵器坏A Iの変化—消費地の様相」『婆良岐考古』第18号 婆良岐考古学同人会 1996年5月
- 茨城大学考古学研究室『鉦田町史 原始・古代史料編（鉦田町の遺跡）』鉦田町 1995年3月
- 小松崎猛彦・吹野富美夫「主要地方道水戸鉦田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 平出久保遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第98集 1994年9月
- 矢ノ倉正男・茂木悦男・成島一也「坂戸遺跡 主要地方道小川鉦田線当間交通安全施設工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第180集 2001年3月

# 写 真 图 版





東ノ越遺跡（西部から中央部）



東ノ越遺跡（東部）

PL 2



第2号住居跡  
完掘状況

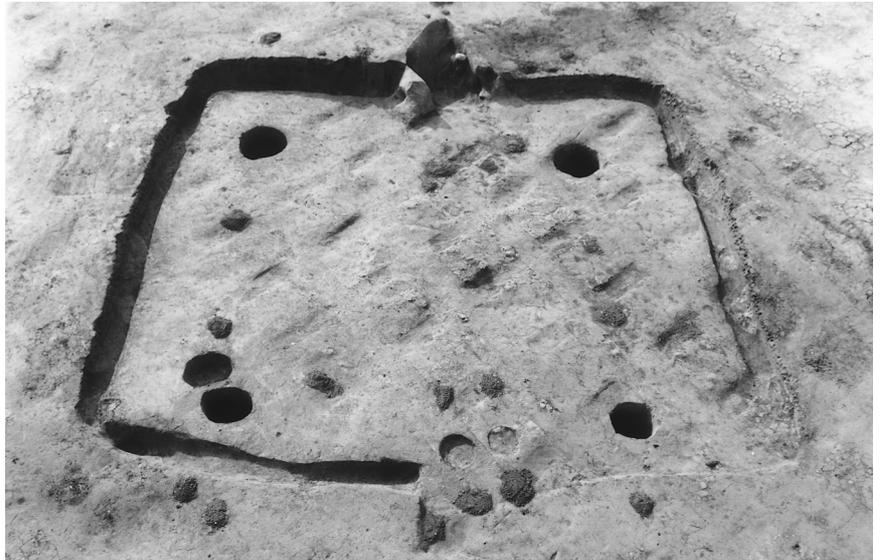


第3号住居跡  
完掘状況



第3号住居跡  
竈遺物完掘状況

第 5 号住居跡  
完 掘 状 況



第 5 号住居跡  
竈 完 掘 状 況



第 6 号住居跡  
完 掘 状 況



PL 4



第 6 号住居跡  
竈完掘狀況



第 1 号住居跡  
完掘狀況



第 4 号住居跡  
完掘狀況

第59号土坑  
遺物出土状況



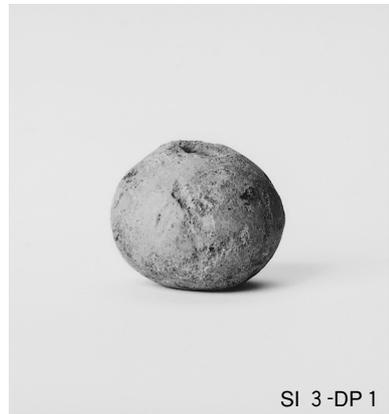
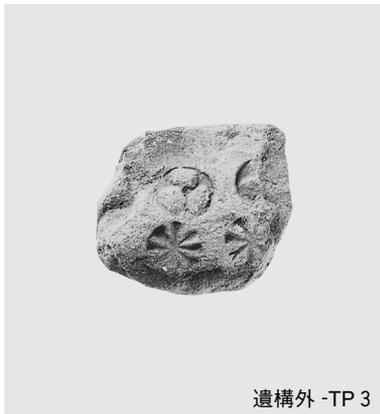
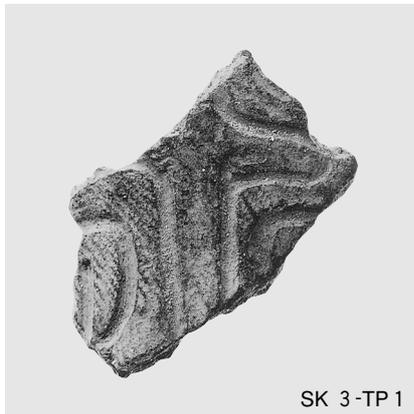
第1号井戸跡  
完掘状況



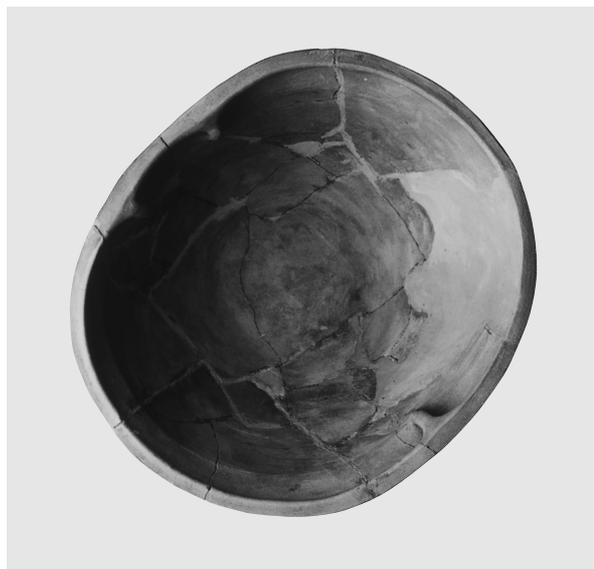
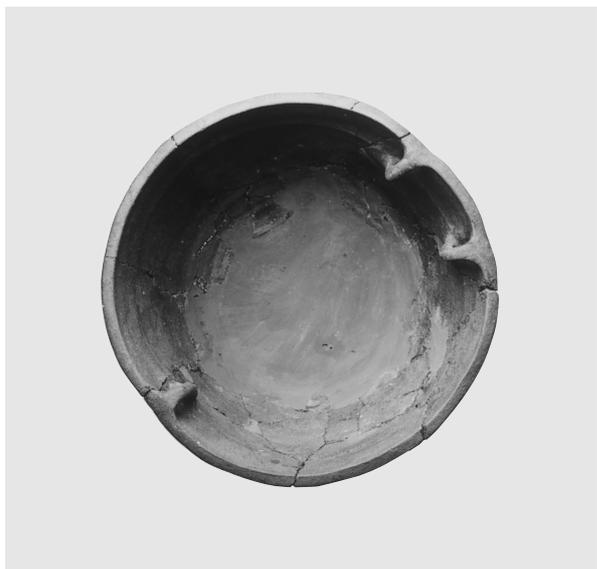
第2号井戸跡  
完掘状況



PL 6



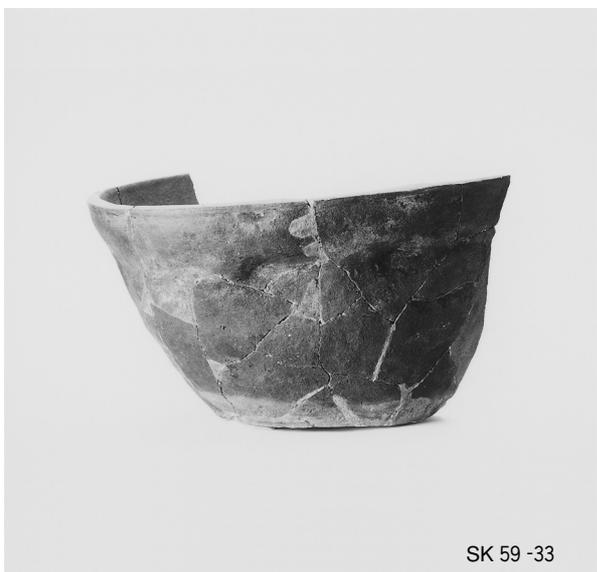
第2・3・6号住居跡，第3号土坑，遺構外出土遺物



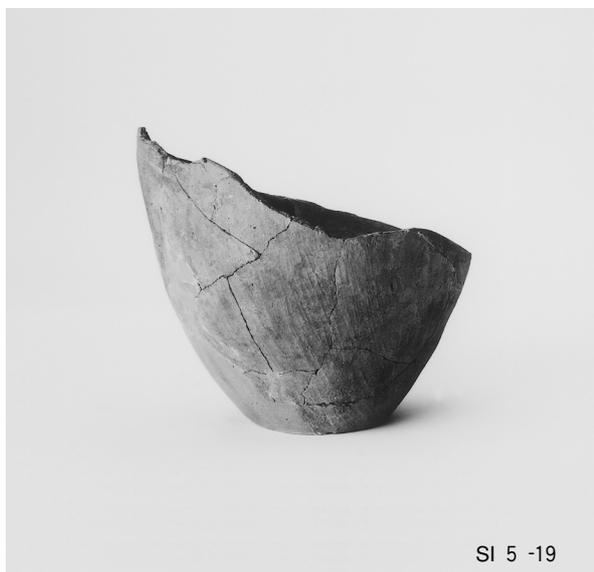
SK 59-34



SK 59-35



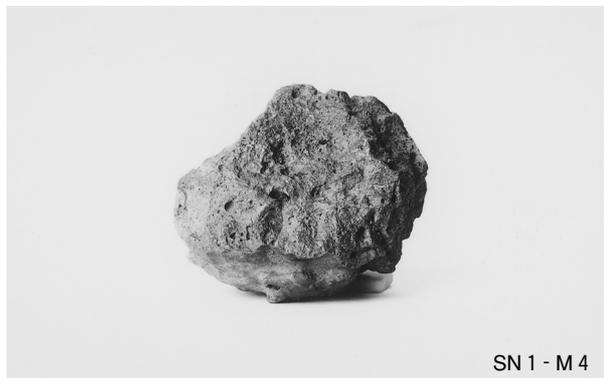
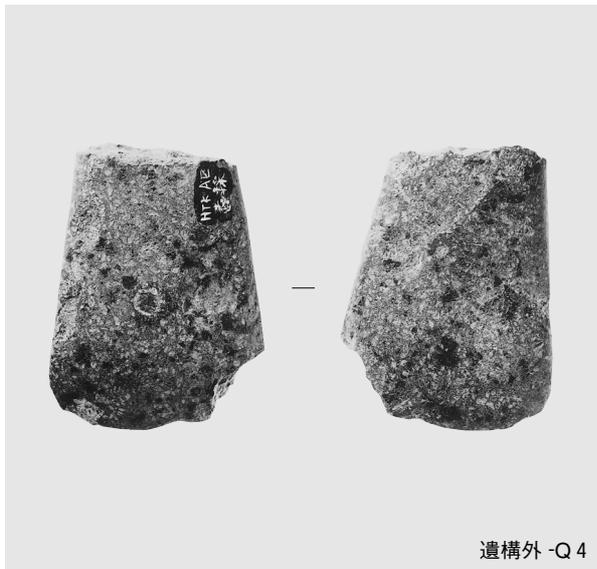
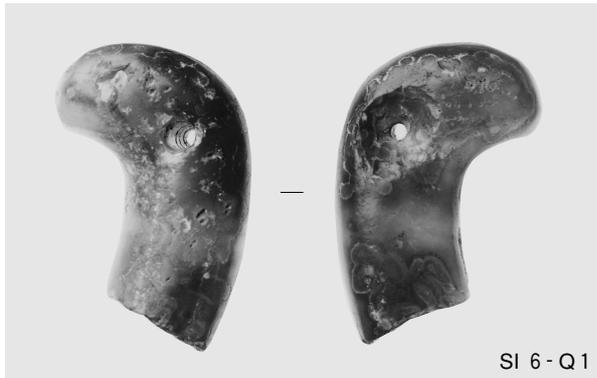
SK 59-33



SI 5-19

第5号住居跡，第59号土坑出土遺物

PL 8



第 6 号住居跡，第 1 号粘土貼り土坑，第 1 号溝跡，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第301集

東ノ越遺跡

一般県道大竹鉾田線道路改築事業  
地内埋蔵文化財調査報告書

平成20（2008）年3月19日 印刷

平成20（2008）年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 野崎印刷紙器株式会社  
〒311-0114 那珂市東木倉280番地の3  
TEL 029-295-3331

